

漫草仕組  
子變

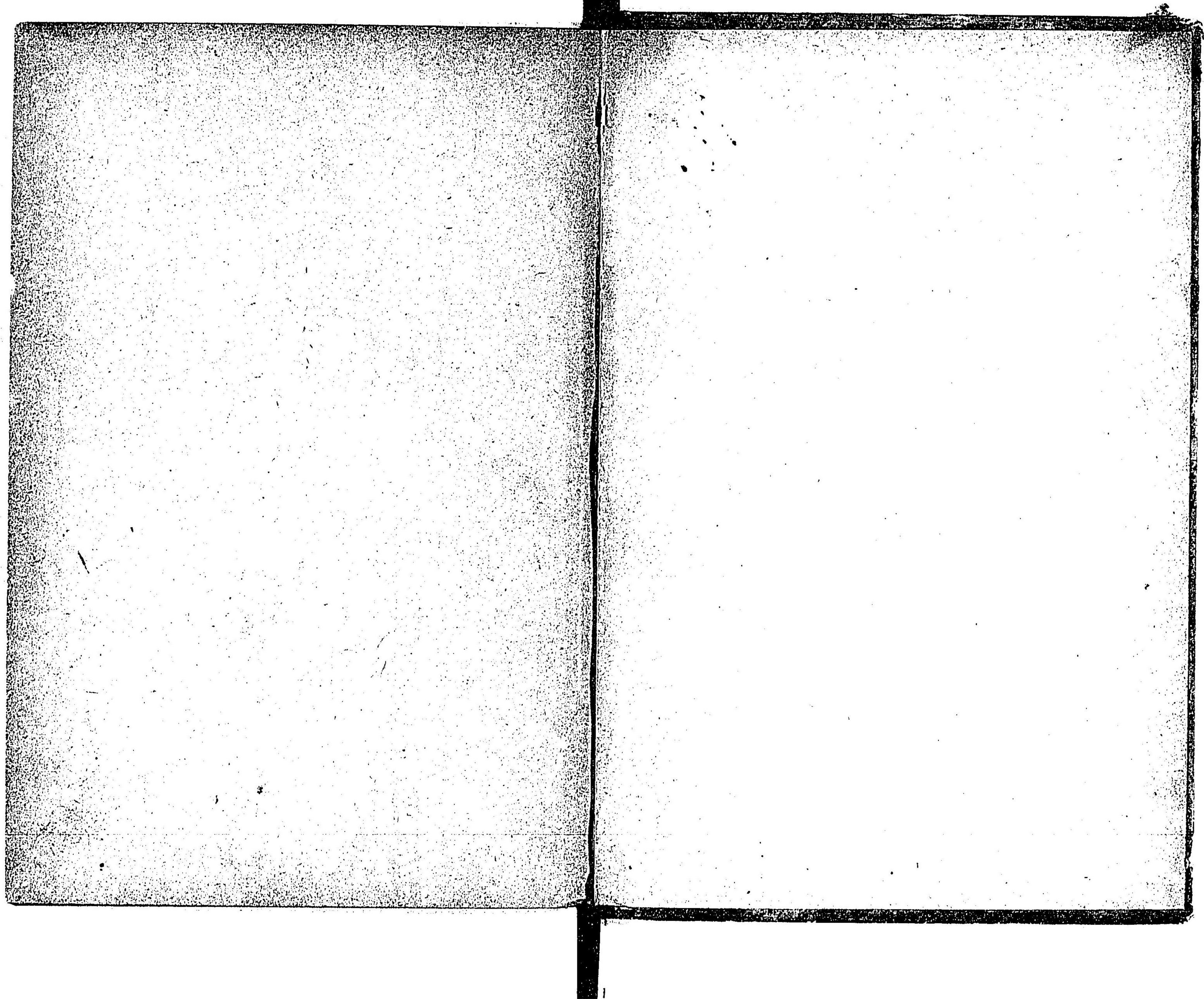
419  
3  
129

風園主人  
戲著

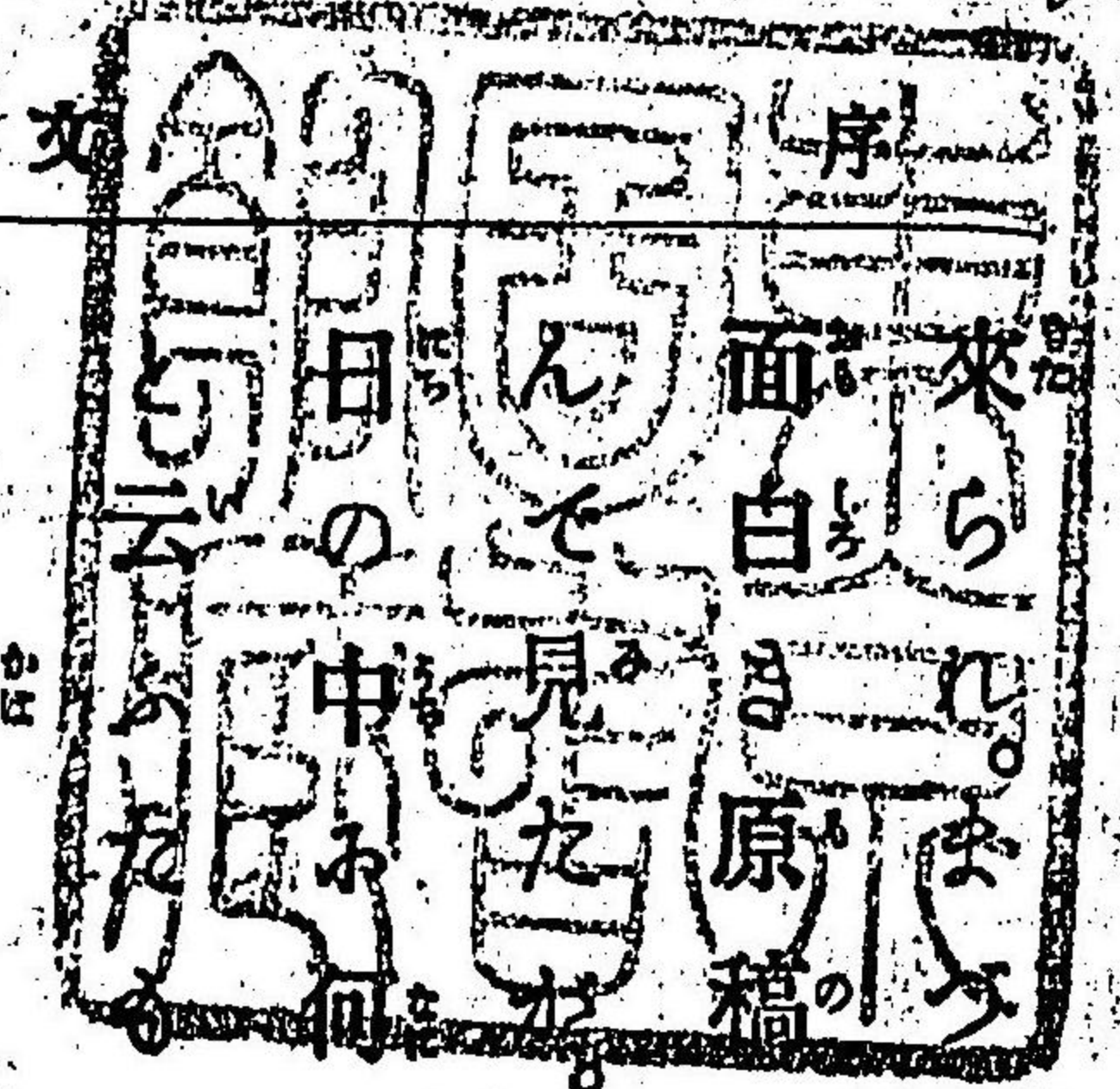
東京  
共隆社發行



東京橋元區寄町東洲堂印



No 960 / 23



共隆社の人達元日の朝年禮かねて予が寓所  
序文にかへて分疏を角太郎

来られ。ま  
面白き原稿  
見たり。即座より好き趣向も附せ。何れ二三  
中何れかの面白きもの考へて返事いたさむ  
と異ツと事浮び出さず。所が細君策を獻トて  
日く。彼の馬琴翁が一世の著作なる八犬傳に假  
作り。八人の變痴奇男を出し。爾も八犬傳の要所



要所を其まゝ滑稽た事は書直はしての勸  
 め口はこれの妙あり。出來おつた。と鼻下長拔  
 して細君を褒め直共隆社へ飛で行て此事  
 を話すと。なるほど夫の面白い考へ早速原稿を  
 纏めて下されとの依頼に承知いたりと立  
 歸るや否か初机は對ふて八犬傳と首ツピき。一  
 枚二枚と書きかけて見たがイヤ苦しい事く  
 宛然無甲斐性な親ガ八人の子左を控へ其  
 身の治め方困つた様にて。實は筆を持餘しと  
 が。其様此様する中。共隆社よりの原稿はどうち

や。後稿の未かと矢の如き催促。何れ後より。今直  
 よと分疏の楯並べて書了た尻より二枚三枚と  
 使し持せ。漸う纏た八變子の身上併し前も陳  
 ふが如く。餘程趣向あ束縛さるゝ所あるうへ取  
 急いた原稿なれば。八個の玉が飛た事かいた所  
 もあり。夫れゆゑ芳流閣の高き評判を得ぬの覺  
 悟の前ながら。紙屑籠のお馴染甲斐。那の赤岩  
 の一角ならで。一冊お求め下たされたと。道拙  
 が火遁のおゆつなき口上陳べて序文の代りよ  
 信乃。

明治廿三年の早春

繪入自由新聞編輯の餘暇に筆採つて

香風園の主人あるす

仕漫 組章 八 變 子 目 録

○ 第 壹 笑

○ 第 貳 笑

○ 第 參 笑

○ 第 四 笑

○ 第 五 笑

此目助已惚て縁日遊び  
 大好憐れじで奇樂を授く  
 妙劑芋に掛つて芋靈を現し  
 奇代奇に感じて行脚を志す  
 痴能愚にして兩親を悩し  
 難作死に瀕で賣物を賤す  
 兩子臭を疑しんで素性を糺す  
 兄弟力を一にして事業を企つ  
 痴能奇品を賣て芝浦に利益を擗し  
 呆助筆を振つて市川に墨を塗合ふ

○ 第六笑

呆助奇薬を見認て道拙と争ひ  
痴能京師に飯りて放蕩を極む

○ 第七笑

阿瞞計りて請状を送り  
痴能欺いて餓頭を喰ふ

○ 第八笑

邪九郎の指揮に懸取青樓を襲ひ  
風流閣の屋上に両子勝惚を籠ふ

○ 第九笑

糞五兵衛怒て蘇者を撃ち  
洋漢老醫却て生氣を失ふ

○ 第十笑

伏見の酒亭に懇親會を開き  
宇治の陋屋に三子顔を接す

○ 第十壹笑

屈野姿を變じて仇敵に近き  
嘉平色も沈れて欺網に罹る

○ 第十貳笑

俳優竊に骨牌を取替へ  
技師返つて欺罔の裏缺く

○ 第十參笑

芋山道拙面目玉を踏潰し  
芋阪屈野獅子鼻を高延す

○ 第十肆笑

舊を説ておひし不幸の身を歎き  
門を閉て作太郎無法の行を修す

○ 第十伍笑

涎小帯に掛りて芋の筋を舐し  
變子猫を退治て家の禍を断つ

○ 第十陸笑

熊の子と聞いて美女逃げ  
虎の子と聞いて土人圍む

○ 第十柒笑

珍兵衛身の難を救れて喜び  
奇代玉の所在を知つて勇む

○ 第拾八笑

八

金城は偽兄弟玉搜索の手順を讀し  
大坂に三變子初對面の趣向を疑す  
精神勞せて新趣向を考へ  
船舞臺にて廿五座となる  
半塚を建て比目助の靈を弔ひ  
一寺を築て八變子餘世を送る

○ 第拾九笑

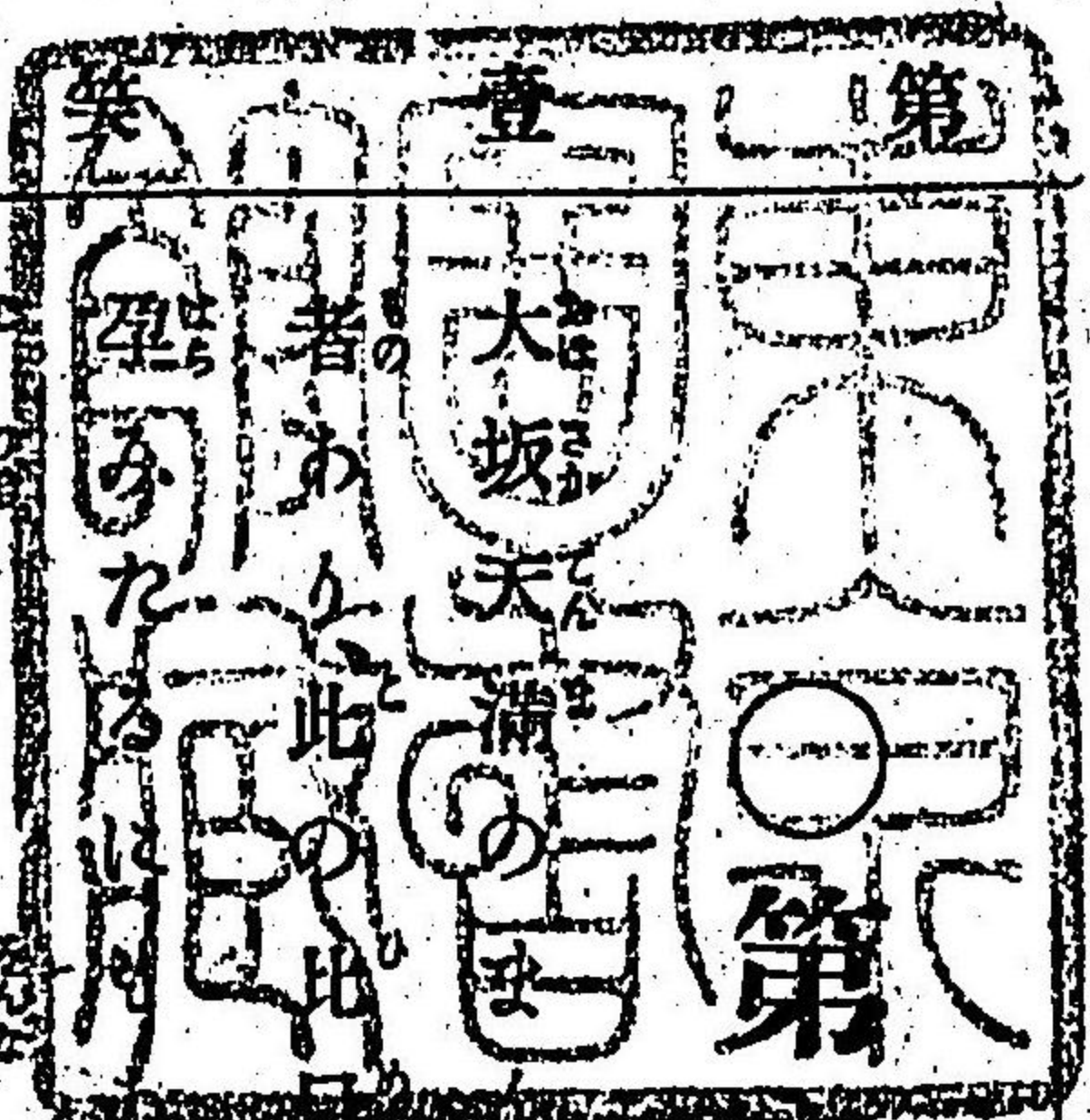
○ 第貳拾笑

通計貳拾笑

特 11  
824

漫草 仕組 八 變 子

香風園主人戲著



第壹笑

比目助已惚て縁日に遊び  
大好憐れむで奇藥を授く

中に傘張を營業とする伏屋比目助といふ  
助の母親が在原屋業平の姿書吞ひと夢て  
らざるべけれど餘は目尻が下つて産れ、  
字引にある女といふ字見ても顔の格を崩すほどの男然れ  
と此上もあゝ醜男子おれバ千日前へ往て書看板かけ、サア  
入らはいくと木戸錢とつて見世物にぞるから又た婦人

九



の見物もあらうかれど、衣裳かつがしての嫁入の誰も手の  
 出し人が有るまいと、近所の人の悪口あり併し、已惚と徹  
 氣さきもの世界にさしと大學の何枚目どかに出てあると  
 やら、他人から見れば夫ほど可笑い醜面でも本人の心に  
 ツて見れば我ほどのものが何故かう婦女にいやがられる  
 であらうかとの不審、不審時ありと澄しても居られず、此上  
 なほ男ふり香はして見せうと、己惚た枝ふり延しあがら花  
 いかだへ々々顔へ塗りつけ結んで見たさ縁日さへ出  
 かけ我見そめよかしに歩き廻るの反ツて近所へ笑ひ種を  
 蒔く原因、往昔の女の顔よき殿御に思ひを通はしたもので  
 やが今の婦人の學門が出来て智恵のある男でさへあれバ



此目助誤て辛異藥を振掛る

第 壹 笑

顔の二の次へ廻すと見える借も、  
と歎息するも可笑し、今日も今日とて目的の  
さがさんと朝から湯に浴て身体を磨き立  
爲る所へ遣て来た家の金成大好といふ  
も口までが多辨。イヤ比目助さんマア朝  
し込で何方へ往ッしやるナ、ムいど  
しいナ、イヤ申戯であいのれし相  
や、敵手の素人か、藝妓か、ナア誰にも  
けにお聞かせヨ藝妓として見れば手  
であくは新町通ひ、しやお前の事おも  
あといふ夕霧の様あ太夫でもあらう、さ  
顔の世の中になつた  
とて目的のあ顔の買主  
てサア出やうと  
老人、年の老  
大層めか  
朝ッから  
宜のが出来たら  
相か顔が証  
言のせぬから我  
北の新地か夫  
思ふてゐる哩  
さすともや

とお聞せ、斯いふ私も若い中の随ふん覺えがあつた忘れ  
 も仕ない十八の春のと、北地の高田屋から出てゐた小糸と  
 いふ藝妓と深くあり天井にあつての對の蠅除玉、違へ棚に  
 在ての料紙と筆、骨が赤いから蒲鋒に成うとまで言かはし  
 たが新米下女の焚き損ね飯にあらぬがお清の餅、其の小糸  
 にの古くより附てゐる阿波の藍玉大盡あつて私と小糸の  
 深う染つた色戀を知り、藍玉の青うのあらず、真赤にあつて  
 の意氣地ばり、是非小糸を落籍せて國許へ連かへると力み  
 返つても肝腎の小糸のツンと澄し込み彼の様を人の厭ぢ  
 や斷つてお呉れとチャ／＼張て承知せず所が小糸の兩親  
 の大の掴み家ゆる、オーさうかと聞う筈なく如彼いふお大

八 變 子

第 壹 笑

盡に落籍されたらお前の焼俵だからウンと承知としろと  
 罷しう云ふので小糸の家に住た、まらず私と呼出して斯  
 斯だから逃て呉よとの事に一時の困つたが夫ほどまでに  
 慕ふて呉るものを連れて逃るの否ぢやとも言へず其様かと  
 言て此ま、遁亡ての世間へ面目赤いといろ／＼考へたが  
 トント宜い考案も浮す夫ゆる度胸をそゑて亡命する事と  
 あり二人の揃への衣裳こしらへてシャン／＼と紀州  
 和歌山の親類へ行た容子の實に見せたかつた、オット／＼  
 うつかり昔し話しに能弄戯がまじり入齒がはづれたアハ  
 ハ、ハ、ハ、と大好が我れ面白にえやべり續くるに比目助の  
 物の云ひツ端をうしきひ問のぬけた辨慶見る様に出かけ

八 變 子

と聞せし斯い私も若い中ハ随ふん覺えがあらぬ忘れ  
も仕ない十八の春のと北地の高田屋から出さるた小糸と  
いふ藝妓と深くあつた天井にあつての對の棚除玉連へ棚に  
在ての料紙と筆筒があひあら浦跡に成うとまて言かはし  
たが新米下女の焚き損ね飯にあらぬがお清の餅其の小糸  
にの古くより附てゐる阿波の藍玉大盡あつて私と小糸の  
深う染つた色戀を知り藍玉の青うのちらす真赤にあつて  
の遺氣地ばり是非小糸と落籍せて國許へ運かへると力み  
返つても肝腎の小糸のツンと澄し込み彼の横を人の服ち  
や断つてお呉れとチャク張て承知せず所が小糸の兩親  
の太の個み家ゆゑオトさうかど聞う善不作如彼いふか大

第 壹 笑

盡に落籍されたらお前の僥倖だからウンと承知としろと  
言しう云ふので小糸の家に住た、まらず私と呼出して斯  
期だから逃て呉よとの事に一時の困つたが夫ほどまでに  
慕ふて呉るものを連て逃るの否ぢやとも言へず其様かと  
言て此まゝ遁亡ての世間へ面目あいといろく考へたが  
トント宜い考案も浮す夫ゆる度胸をそゑて亡命する事と  
あり二人の揃への衣裳こしらへてシャンくくと紀州  
和歌山の親類へ行た容子の實に見せたかつた、オットく  
うつかり昔し話しに能弄戯がまじり入齒がはづれたアハ  
ハ、ハ、ハ、と大好が我れ面白にまやべり續くるに比目助の  
物の云ひッ端をうしあひ問のぬけた辨慶見る様に出かけ

たまゝ庭に立往生。イヤとんだお能弄戯を承はりました  
 私をどの何して〜其様お氣の利た事が出来ませうナト  
 御指南より興りたいたので御ざりますと頭を掻き〜いふを、  
 大好聞いて目も立つ入歯出してニコ〜と笑ひ。ナニ指  
 南ぢやと止て下され能くなぶる人ぢや併し斯云へバ自慢  
 する様ぢやが私の若い中よの種々お事があつたヨ、外の事  
 の知らさいが遊ぶ方から随分甲良を経たヨ、マカラ指南お  
 ど、言れての困るが知つてる事だけの何でも話しませう  
 と卑下する様で自慢する大好の言葉に比目助おほきよ有  
 難がり。さう言れて甘へる様での有ますが實の少し伺ひ  
 た事がありませうト是より女の子も可愛がられる秘傳を

八 變 子

第 壹 笑

問ふに大好鼻をうごめかし。それだけの事なら譚のない  
 事私がお家へ歸つて妙薬を調合して上げませう此の薬の實  
 に奇代お方で効能のある事妙ふしきあり先づ群集の場所  
 へ行て是とおもふ女に振かけると直又其の者が馴々しく  
 物いひ交し、見み知らずの藝妓おどでも薬さへ掛ければ「オ  
 ヤあおたの何方へ行ッしやるノ、アレ住吉、どうか妾も連て  
 ヲッて頂戴」といふ様お次第では山田長政がシヤム口國へ  
 行て王様になつた時分忽必烈に頼んで日本へ進上ありま  
 そと持して來したものだ相でマア論より証據一服調合し  
 て來てあげやうと獨りのみ込ながらアタフタ駈て歸るこ  
 そ壯健なる爺おのあり

○第二笑

妙劑芋に掛って芋壺を現し  
奇代奇に感じて行脚を志す

家主の金成大好の歸る間もなく持つて来た一服の黒焼  
薬〇 サア く 出来た く 是さへあれバお前さんの宿願成  
就する事儘かに相うけ合ひまをしいぶ右の通りの次第な  
れバ如此く自慢して相渡するのなりと若い時分に見た俳  
優の似聲つかふ可笑しさ、あれども比目助の笑ふ所か鬼の  
首取ったほを喜び上り。これの何も何から何までお世話  
様にありまして實にお禮のまをしやうも御座いません、お  
言葉に甘へ此のお樂の頂戴いたして置きます、いづれ夕方

またお自にと言さしたま、件の樂を懷中へ入れて家を飛  
出とよ。コレは待たせへ、また能く樂劑の使用法  
も教へて上げぬに遣り損なつたら取かへしが成ぬ夫を風  
に散さぬやうに斯してと委しう教へてかへる夫好の言葉  
を耳へも掛けず比目助の獨り呑こみ。モウ、大丈夫、  
能く分つて居まると早や夢中にあつて大好節どの、下駄  
と自分の下駄と片殿に穿したる氣がつかず我家を飛田也  
て先づ北野の大融寺へ遣て行さしが此寺の東京の曹川様  
とかお岩稻荷といふ様は藝妓さどの藝詣多く今日もさ  
はひ線日に當つた事ゆる北の南地あたりの藝妓の素より  
遠くの鳩之内邊から脱車飛せてお参詣をなし居るもの澤

# ○第二笑

妙劑芋に掛って芋靈を現し  
奇代奇に感じて行脚を志す

八  
家主の金成大好の歸る間もなく持ッて來たの服の黒焼  
樂がきりサア〜出來た〜是さへあればお前さんの宿願成  
就する事儘かに相うけ合ひまをしほ右の通りの次第な  
れば如此く自慢して相渡するのなりと若い時分に見た俳  
優の似聲つかふ可笑しさ、あれども比目助の笑ふ所か鬼の  
首取ッたほど喜び上り。これの何も何から何までお世話  
様にありまして實にお禮のまをしやうも御座いません、お  
言葉に甘へ此のお樂の頂戴いたして置きます、いづれ夕方

# 第二笑

またお目にと言さしたま、件の樂を懐中へ入れて家を飛  
出さよ。コレ〜待たッせ〜また能く樂劑の使用法  
も教へて上げぬに遣り損なッたら取かへしが成ぬ夫を風  
に散らぬやうに斯してと委しう教へてかへる大好の言葉  
を耳へも掛けず比目助の獨り呑こみ。モウ〜大丈夫〜  
能く分ッて居まると早や夢中にあつて大好爺の〜下駄  
と自分の下駄と片跛に穿しにも氣がつかず我家を飛出し  
て先づ北野の大融寺へ遣て行きしが此寺の東京の豊川様  
とかお岩稻荷といふ様よ藝妓あとの參詣多く今日もさい  
はひ縁日に當ッた事ゆゑ北の新地あたりの藝妓の素より  
遠くの鳴之内邊から腕車飛せてお參詣をなし居るもの澤

十八  
 ある中又是の中所の商家の娘もや有らん年頃十七八水  
 際だつた美しくしさ見るより比目助目を細うあし。イヤど  
 うも奇麗な娘ぢや前年東京見物へ行た時新富座で見た新  
 駒どかいふ俳優の様だ然して如彼を娘が三保の松原邊を  
 ウロついて居たから何したつて天女どしか思へあいヨ同  
 じ薬を掛るなら斯いふ娘又薬ふり掛けて言はして見たし  
 と比目助の大好から貰ふた例の黒焼出して袋の口わけ背  
 後より徐どふり掛け様とぞる折からトボく来かゝる一  
 人の婆さん。オヤラツかりして彼の婆さんに掛けてハ大  
 變だおまたお氣の毒ぢやが負つてお寺まで連れてつて頂戴  
 あと、言れて堪るものか、ア暫時お見合せとして其所邊

十九  
 まで跟て行からと娘の後追ふて行くに其の娘ハ大融寺を  
 出ると後さへ願ヒサツサと歩く足の疾さ元來あるき下手  
 亦比目助駈る様にして跟て行くに娘ハ淋しい方へ計り歩  
 みを運び果ハ三番村の野道へ出たより了得の比目助も小  
 氣味わるうあり、コリヤひよつとぞると狐的に化まれたの  
 でハ有るまいか眉毛も唾でも塗て置うと、獨り語つゝ僧は  
 跟て行くうち比目助また大膽ななつて假令あれが狐にし  
 た所があれほどの美人から女房にするとも恥かしうない  
 當世の立派な人達の皆を猫を奥方にせられるもの狐を女  
 房に持たどて何の憚る所があらう、ヨシ、薬ふり掛けてや  
 らんと再び袋の口ひらきて人ぞれす背後からハラ、ハラ、



とふり掛しに折わるくして颯と吹き来る風のためは黒焼  
 の娘にかゝらずして此度ある焼芋屋の店へ散込み今蓋ど  
 した焼芋の上へ掛りたれば比目助是のと驚く時しもア  
 ラ不思議あるかお焼芋より一線の白煙たち昇り風あきに  
 此方へ靡さ比目助の懐中へこそ入たり然れば比目助い  
 よく驚き芋屋より小言いはれぬ中と其處を後よ一二町  
 逃るといなし逃げ来りしに幸ひも芋屋から追手の掛ら  
 ざれど奈何せし事か俄に腹痛み出して歩く事もあらず漸  
 う通りがけの車夫を呼留て夫へ乗り辛じて家まで歸り來  
 しに家主の大好またり顔に遣て来て。サア比目助さんど  
 うであつた甘く行たであらう實に彼樂の妙奇的烈サ然し

て行た先の何所であつたナ、かうツとムア分ツな今日の大  
 融寺の縁日だから大融寺だつたらう大融寺から言すと知  
 れた参詣人の藝妓、イヨ羨ましい事く此所を情郎めと春  
 中叩かれて比目助太息を吐き。サアさういふ体裁に往た  
 のから御膳上等ぢやが今日の話すも面目かい大失策、マ  
 一通りか聞き下され、と居直りさま苦し相に。實に今日大  
 融寺へ往た所が十七八の奇麗な娘に出會、此奴に一番振掛  
 けて遣うとする所へ婆さんが來合せたゆゑ折悪しと開か  
 けた黒焼の袋の口を其の娘の跡から跟いて往くと追々  
 野道の方へ出て行くより若しや狐でいかにと思ふと何  
 とおふ氣味わるうあつて一度の歸らうとしたが亦た能く

考へると假令狐にしる此ほどの標致もつ女を宿の妻とし  
 たら世間へ對し耻かしうまいと更に思案を定めて頂いた  
 彼の黒焼を袋あけて振かけると生憎風颯とふき來りて黒  
 焼の其の娘に掛らすして傍の焼芋屋の芋に掛り是の失策  
 たりと驚くうち焼芋より一線の白煙たち昇りて我が懐中  
 へ入るよと思ふと同時に腹が此通り俄に痛み出し苦しう  
 て苦しうて歩く事も出來ず今がた車夫に扶けられて歸ッ  
 た計りと云ふさへ切なさうさ比目助の物語り聞きつゝ大  
 好の大きさに驚き。それのマア大變な事ぢや、松の精靈とか  
 櫻の精靈とかいふ事の唱歌や淨瑠璃で能く聞た事がある  
 が焼芋の精靈といふ今日聞くが初めて、長命すれば恥おほし

入 變 子

第 二 笑

と言へど長命すると亦た随分かはった物を見聞するワ、マ  
 ア何の兎もかくお醫師を呼んで見て貰ふが宜からう。イヤ  
 醫師に診察もらへば前の次第を言ねばならず此をいふの  
 の餘り面目ない一件ですゆゑ何か買藥をして服ませう、ど  
 うか御願ひで御ざりまするが近所の人でも頼んで藥一服  
 買に遣て下さりませ、と苦しい中から比目助の頼み。なん  
 の夫ほどの用事に近所の人の手が入用私が行て直に買  
 ふて來て上げやう、と大好の駈て行く間もなく一服の藥を  
 購め來り。サア、早う服ッしやれッレ水も汲で來た、と  
 茶碗へ汲んだ水へ藥添へて出すを有がたしとて比目助呑  
 み込み氣の故か少し快くあつた様ですと云ふに大好も喜

んで。今一服買ふて来て置いたから姑く過て又た服ッし  
 やるが宜い、イヤ不思議な事ぢやと眉うち顰めての介抱折  
 から又た俄に比目助の苦しいとて呻き出し座敷中を轉が  
 り廻るに大好大きき氣を揉みながら後より身をまッかり  
 押へいろく介抱する時しも一聲たかく比目助がアツと  
 叫びつゝ口より吐出したるの腎奇贅痴窮珍呆倭との文字  
 わる八個の玉、キラくど光りも何ともせず虚空はるかに  
 散うせられたれば大好いよく驚きしが哀れや比目助の吐出  
 した玉を現世の置土産に空しき人の數に入たり然れば大  
 好おもふ様我れ黒焼を調合して與へざれば比目助も此の  
 様な事になるまいもの、言ひ我々手に掛けて殺したも同

子 變 八

第 二 笑

様、實に氣の毒な次第なり就て今日より比目の菩提を用  
 ひかた。今の八個の玉の行方を求むるこそ宜しかるべ  
 しと茲に早くも決心なし即座に髪を剃り落し是の奇代ど  
 うも奇代といふ其の奇代の二字を取て我名どおし那の八  
 犬傳の、大の如く日本内地を廻國あす事になりたるの殊  
 勝とや申さん笑止とや言ん

○ 第三笑

痴能愚にして両親を惱し  
 難作死に瀕て寶物を眎す

美日さす西京の市をさるの毛の人に入たらぬ三本木とい  
 ふ土地に芋塚難作とよべるものあり難作以前、豊年ぢやア

難作ぢやどカッぱれ踊ッて錢まうけたる幫間にも非ず播  
 州姫路の藩士にて維新前までの兩刀さして威張しものな  
 れど戊辰の後家祿奉還して小商法を初めたれど士族の商  
 法まうかつた例しなく瞬く中に資金を皆な損耗て仕まひ  
 果の故郷にも居にくうなッて西京の親類たよッて登り來  
 り少し手の書けるを頼みに寺子屋初めたる間もあふ身の  
 中風てふ病に罹り歩行さへ自由を得ぬ様になり行さあら  
 是も仕様がなしと寺子屋廢して道具など賣喰ふ漸く暮し  
 て居るうち病氣の次第に重りゆさ何日何時知れぬ程もあ  
 ったれば難作或日一子の痴能を枕近う呼びよせ。コレ痴  
 能や私の病氣も斯う重うなッての連も快くあらぬゆゑ今

入 變 子

第 三 笑

の中よ其方へ云ひ置く事がある其方も幼あ乍ら少しの覺  
 えても居たであらうが三年前も亡ッた其方の母さんといふ  
 の家中での智者と評判とッた小山宗界の娘で丁度今  
 より二十年以前自の劍道に秀しを見こみ小山氏より強て  
 妻よ娶り吳よと申し込れ過たる縁との思ひしかど懇情黙  
 止難くて遂よ婚儀をなし其の後ハ交情も睦まじく暮して  
 居ッたなれど何の不幸か夫婦の間よ子實なく妻のお福の  
 夫を愛ひ窺よ鎮守神へ祈願を籠しに丁度一週日の結願福  
 夜よ焼芋を喰ると夢て孕ひだの即ち其方神の授子といひ  
 伶俐お母の胎内より産れたものなら定めし發明であらう  
 と思ふたハ大的進ひ其方ハ一圓紙幣持ッて石油一升買に

往ても利金とる事を知らぬほどな呆漢もの、私が生てゐる  
 間さへ案じられるに今此まゝ死んだ曉まの何して暮して  
 往をるか心配であらぬと涙と涎一所にダラくと流し  
 て歡くに流石の痴能も言葉なくて始くの差し俯き居たる  
 が零時あつて頭を擡げ。父さん何も心配して下さります  
 ナ今あなたが出なつたら政府へ願ふて四條の橋詰へ大き  
 赤門こしらへて張番させ此所通行の人とさへ見れば一人  
 前一錢づゝ取れば遊んで居て甘い錢まうけ、假令其内を十  
 分の一税として納めるとしても大した金が懐中に残るゆ  
 る此金を三つに割り一分の私の生活に費ひ又た一分の積  
 金、一分のあなた位牌へ好み三味線甘煮にでもして備へ

八 變 子

第 三 笑

ますから今にも死だら無駄な焼耐火焚いて迷ふて出ない  
 様にして下されと呆然た事を言あらべるゝ難作眉をうち  
 ひそめ。あるほど其方のいふ事、道理の様ぢやが今時そ  
 んち所へ門立させて錢とらす様な事を政府で許される筈  
 がない、其様な事して錢取れる位から今まで又世間の人  
 仕て仕まふて居るワ馬鹿くしい、まだ其様な事をまをし  
 て居るから案じられて成らぬ何うか私が亡なつた後でハ  
 ナト玄ツかりして世間の人達又笑はれぬ様にして是れ、然  
 して日頃其方にも話さなんだが自宅に斯いふ寶物が  
 あるト、慄ふ手を差し延て箆笥の抽斗より執出だしたハ錦  
 の包物、三拜して重々しう結び目解き中ある紙袋、痴能の前

住とも利金とる事を知らぬほどな呆漢もの私が生くる  
 間さへ案じられるに今此まゝ死んだ曉まの何して暮して  
 住とるかかと心配であらぬと涙と涎一所にサラサラと流し  
 て黙くに流石の有能も言葉なくして始ぐの羞し俯さ居たる  
 が零時のツて頭を掻げ。父さん何も心配して下さりませ  
 十今あなたか亡なつたら政府へ願ふて四條の橋詰へ大さ  
 ぶ門をしらへて張番させ此所通行する人とはへ見れば一人  
 前二銭づゝ取れば遊んで居て甘い銭まうけ假令其内と十  
 分の二税として納めるとしても大した金が使中に残るゆ  
 ら此金を三つに割り一分の私の生活に費ひ又た一分の積  
 金一分のあなた位牌へ好む三味線甘煮にでもして備へ

ますから今にも死んだら無駄な焼酎火焚いて迷ふて出ない  
 機にして下されと呆然た事を言あらべる又難作肩とうち  
 ひそめ。あるほど其方のいふ事の道理の様ぢやが今時そ  
 んお所へ門立させて銭とらす様お事を政府で許される筈  
 がない、其様な事して銭取れる位から今まで又世間の人が  
 仕て仕まふて居るワ馬鹿くしい、まだ其様お事をまをし  
 て居るから案じられて成らぬ何うか私が亡なつた後でハ  
 ナト玄ツかりして世間の人達又笑はれぬ様にして呉れ、然  
 して日頃の其方にも話さあんだが自宅にハ斯いふ寶物が  
 あるト、慄ふ手を差し延て簞笥の抽斗より執出だしたハ錦  
 の包物、三拜して重々しう結び目解き中ある紙袋痴能の前

八 變 子

又笑つけ流るゝ涎ぬぐひも敢す語り出すやう。折も此の一物の昔しくゝの其の昔し爺が山へニンヤラヤツと登る婆が河へシャブくゝに出かけたころ笑はよや尊者といへる羅漢どのが清水の土偶師の許へ自分の像拵へさせよ来て出来上った折り冠サヤと云ふて置て行れた笑薬ふしきよも我が先祖の手入り之を持って戰場へ立向ひ敵を笑ひ殺されたと殺人あるか分らず我れ運つたあくして勘く負窮なせせ萬一の折よ此の薬もちて戰場へ走せ向ひ薬力のあらん限り敵を笑ひ殺さむものをと苦しい中よも手さへ着けず今日までも秘藏おし來りしが是も其方へ手渡しいたせば夢おろそかよ致さぬやうにと慈愛をこめし父の

第三 笑

言葉に愚ながらも痴能の喜び。この有難き賜ものあり決しておろそかよ致しおせずまづ兎も角も品一見えたと袋の口を開よ掛るを難作えばしと押といゆ。汝が見ずとも自が是よて薬力の試験いたし呉んと袋の口を開くや否や我よもあらでドツと噴飯しウフ、、、アハ、、、マ、どうぢやアハくゝくゝコレ痴能ウフくゝくゝナナ、何と妙なアハ、、、くゝ薬でウフ、、、と物も碌にいへぬほど笑ひ立るに痴能も其の薬力の劇きよ感じ。あるはど實よ妙き薬です私にも鳥渡効能を見せて下されと紙袋取るより痴能も噴飯しアハ、、、コ、コレい色の黒い薬でウフ、、、ア一切あいく父さん水一







八 變 子

も今日として朝から北野の天神へ参詣して錢の儲かる様を  
 好い智恵貸して下され、屹度賽錢といふ利足つけて返し  
 せう程にと祈ッてゐる側に是も大枚二錢の賽錢出して。  
 どうか我々人を驚す様な事が出来る智恵貸して下されと  
 同じ様を祈ッてゐる男あれば痴能の目尻に掛て其の  
 男の顔見て變ぢ奴とおもふと向ふも痴能に目を留て不審  
 がる容子、やがて双方参詣すまして歸らうとする折から互  
 の鼻を撲つ怪しい臭に。是の不思議。これの奇妙と迭に  
 鼻ヒヨコつおせあがら後にあり先にあり一の鳥居前まで  
 來るに彼方の男の不審さ堪へやらすどて痴能は對ひ。  
 モシお前さん餘りふしつけな事を聞く様ですがお前さん

第 四 笑

の何を強い臭ひのするものを持て居あさりいせぬか、どう  
 も餘り臭ひが高いからチヨツと聞て見るので尋ねられ  
 て痴能のさし寄り。イヤ其事あら私も同様おまへさんこ  
 そ餘はと變つた臭ひのするものを持て居あさるであらう、何  
 も此の臭ひ格別ぢや、と鼻うごめかして聞き返すに件の男  
 の眉うちひそめ。夫で私の身にも臭ひが仕ますか臭ひも  
 の身知すとの私の事トんと自分に分りません所で私が  
 身に着てゐる臭物に就ていゝ混入た話があります  
 就てはお前さんの臭物も只の物を持て居あさるとも思へ  
 ぬゆゑ互に持てゐる臭ひもの、譯を聞たり話したり仕たい  
 から其邊の茶店へ入らうで有ませぬかと云ふに痴能も

八 子 燈

夫宜からうと是より二人の鳥居前ある小やかな茶店へ入り奥の一室を借切つて互に膝を寛ぎつゝ。サアアお前さんから何か臭物の譯はあして下されと痴能が膝すゝめるに件の男の。實の所この臭物に就ての斯いふ次第があるのだと聲を低め。私の両親といふのは東京本所二葉町に住み父さんの初め紙屑屋をして居ったところ途中で一ツと買ふた品が掏奴の物であつたどやらで過料金を取れたがクナの初まり夫より漸次ブマが事がついて果の紙屑買をして居る譯も行かずトウ。ホヤや洋燈の毀れは御さいませんか、エーホヤや洋燈のと吐鳴て歩くうち夫婦喧嘩仕さうな夫婦と見ると種々奇事言ふて煽動たて喧

第 四 笑

嘩をさせたらうへ洋燈やホヤが毀れるを見て拾つて歸る様も事をしたもんですから遂に鑑札を召上られて仕まひ、今度の爲る事があいでお恥かしい事ぢやが車夫と零落れゴソサイくど威勢よく挽歩いて居たの宜が兎かく天駄羅と見ると目のあい癖があつて何日も天駄羅屋の前を満足に通つた事なく天駄羅屋の看板見るが際期楫棒を來掛る人のドテッ腹へ當たり街燈を突毀したりするので多い時の三十日の中に五十度拘引されたといふほどゆる車夫も仕てゐるに居られず其所でゴソと風がはりに往來の水まさ那の岩谷商會の車を引張て水を撒く役を未だに勧めて居ますがお母ア父さんと違ひ大の稼ぎ人晝間近所

に住む館屋の三味線を弾きチャンチャカチャンと稼ぐし  
夜の又た地獄の引手サ併し私の夫等の事がトンと嫌ひで  
我れ人間に生れ出たるからよの奈良の大佛を燈心で引ば  
り富岳を火斗ですくって取る様事仕たしと思ひ両親に  
其の所存をうち明けたれど兩親のフ、ンと鼻あしらひで  
褒もせず夫ゆゑ無言で家を飛出したの去年の暮にて其後  
西京へ来て所々方々奉公住して程よき主人もあらば我が  
所存を語って力借んものと思へど是といふ明主も出  
會ぬより未だ志しを遂るに至らず處が今日お前さんに出  
會ひ少し想ふ廉あつて臭物の事を問かけしよ反つてお前  
さんより尋ね返され之れ幸ひと斯して此所へ伴おひしが

元來私が産れた時分に一個の黄色き玉を握って居た故、兩  
親の不思議な事と能く見るに其の玉よの奇の字ありく  
と現はれ居るより親の我を奇次郎と呼たれを我れ奇次郎  
といふ名を好まず、當地へ來りし以來持つる玉が芋の臭ひ  
あるに因み芋皮呆助と呼替へたるが、シテまたお前さんの  
臭ひ物のと尋ぬるに痴能の眉うちえばめ。是の不思議な  
事、私が持つ居る玉も矢はり文字あらはれて、爾も呆の字あ  
りく、と見えぬ、原より我身愚なれど、活る玉、數多あつて互  
に知らぬ兄弟の縁を結び居る事と思ひゐたるに計らず今  
日此所で同じ臭ひすを玉もてるお前さんに面會との天帝  
の紹介なるべし、然ればお前さんに於て異存なく、此場に

八 變 子

て兄弟の縁ひすびたし、猶ほ念のため秘藏する所の玉を見せむと懐中より取出したる錦の帛紗中を披いてフツク、  
 えたる一個の玉を指示し。それ御覽あれ此通りといふに  
 呆助もうち點頭、兄弟の縁結ばふといひ此方よりして願ふ事  
 私も茲に其玉がと懐中深く納めたる一個の玉を出して、  
 そに痴能大きに喜びて。其様話の極つた上の有合したる  
 此の茶碗をホンの當座の盃にして偽兄弟の約をかためむ  
 と先づ痴能より茶を飲ほし呆助とのと差出すを有難しと  
 て呆助うけ取り、グツと一碗のみ下し是より互に三献かさ  
 ねて二人の愈よ兄弟の約を濟したるが、諸斯うして兄弟に  
 寄つた上の俱よ力を協せて何か目覺しい事をしと見せた

第 四 笑

し、就ての茲に一個考へ附てある事があるがナンと夫を事  
 業初に遣うぢや有まいかと眞面目にあつて呆助がいふに、  
 痴能膝を進めて。それハマアどういふ事か一寸と聞せて  
 見て下され、面白い事あら直にも初め様と尋ねれば呆助さ  
 れバとて誇り顔に。その計畫といふのハ斯いふ次第、先づ  
 両頭の杵を製作、又た碓を地と天井に設け、器械もて其の杵  
 を動かせば一度に天井の碓へ入たる米と、地の碓へ入たる  
 米を搗すといふ工夫あるがナンと面白うあさやと云ふに、  
 痴能思はず横手を拍ち。あるやど是ハ新工夫あり直よ其  
 の米搗場をこしらへていといふを呆助おしといめて。實  
 の私も或る金力家に相談かけたに、其人もあるほど面白い

計畫がから天井の確へ入た米をせうして落ぬ様に止られ  
るかと思つて見ると返答も困り夫の電氣で留る様も仕  
すと其場を濁して歸つたが此所まで工夫が附あがら止す  
のの残念な事と當今いろ／＼考へ中ぞと云ふ痴能も落  
力して腕こまぬくも可笑けれ

○第五笑

痴能奇品を賣て芝浦に利益を博し  
呆助筆を振って市川に墨を塗合ふ  
天井裏へ俯せに設けた確へ米入て落ぬ様にする工夫かけ  
れば此の米搗機械の事の其まゝに成たるかはり海上疾走  
器といふ奇代の品を發明したり之の如何ある物かと聞く

に是まで有ふれたる那の浮人形といふものより取つて考  
案したる物あて木の中を抉抜きて小舟の形も製作夫へ下  
駄の様を鼻緒を附て穿に便利ある様にし而て舟の裏への  
樟腦と蠟を練て附けるがゆゑ自と水を切て海上を走る仕  
掛あるが先づ最初二三個こしらへて試したるおまぐれ當  
りの好結果を得たれば發明主の呆助の原より痴能の喜び  
一方あらずこれあれば大丈夫と多くの品こしらへて東京  
へ持ち登り大層な廣告して賣出したるに鳥渡異風た遊び  
道具ゆゑ賣たも賣たも羽根が生て飛ぶ程に賣たの宜いが  
根が樟腦の勢ひで水を切て走る事あれば芝濱から走り出  
したものが千葉の寒川あたりまで浮下駄に身を持って行か

八 變 子

れるも有れば品川の臺場へ突當つてブツくどあるも有  
り、夫ゆゑ小言を持ち込むものやら品をかへしよ來るものや  
ら、イヤハヤ大騒ぎ、果の二人も東京も居り兼ね儲けた金二  
割ふして明日の各自志す土地へ行き暫時身を落附むと約  
束して寝た夜の事一人の盜賊忍び入つて痴能が大切に仕  
舞ある那の笑樂を金と心得、チエーかたじけなしと言たか  
言ぬかス、チエーと出て行た後で夫と心附き是の仕あした  
り残念かと切齒足を鳴して見ても盗た物あら泥棒あかく  
返しに來さうのあし、路用の金奪られあんだが貰てもの事  
と思ひ歸り、翌朝泉助と袂れて故郷の方へ志し又た泉助の  
心に少し思ふ所あれば陸路を取りて千葉へ赴きたり



化學據て道拙奇術を示す

第五 笑

近ごろ成田街道ある市川驛の盡頭に小屋掛して手品を興  
行してゐる芋山道拙とよぶものあり此の道拙武士の果に  
て少し化學の心得あるを頼みに不思議ある手術して見せ  
るに是の面白し不審ありと宿の者等素より近郷近在か  
ら見物も出掛るもの多く毎日くの大入ありしが今宵の  
鎮守神の宵祭あれば取上げ見物の多きに太夫の道拙もヤ  
ツキとあり頃日来演ぬ所の奇術を種々あしたるすゑ火遁  
の術とて多くの薪も火を燃し其上をサラ／＼と苦もあく  
渡りて向ふに山の如く積上たる割木の中へ身を埋ませ四  
面より一時に火を炷がしパツと立昇る火炎の中も身體の  
次第に見えあ／＼たり然る観客一同アツと驚きあがら



八 變 子

其藝の妙あるを賞賛して打出の太鼓を後よ聞いてリヤ  
 と立出しの夜の十二時前ありし此所へ人車急せて來か  
 る一個の男歳のころの二十四五衣服の立派なれと目つき  
 凄く何方となく賤しさの見ゆるの普通の人間と見  
 えす夫ゆる車夫も足下見てか。モシく旦那此の深更よ  
 斯して骨折つて挽のですから先方へ行たら何か少し酒代  
 を遣て下さい其の替り猶ほ骨折つて参りますからと云ふ  
 に乗たる男の。極た代でさへ餘すと高すぎるのだ、それに  
 酒代さど、馬鹿な事を、と除附るに車夫の棹棒下して。  
 高くバ乗つてもらひますまい、此の夜更に些少を貸もらふ  
 て汗水たらすも酒代が欲しさ、夫に酒代さへ呉ぬうへ高い

第 五 笑

あど、の途方もない事をいふ奴ぢや、コレか前の此の權太  
 さんを知らぬのぢや、知らぬから言ふて聞せて遣うが此  
 の權太さまの街道で蟻とまで綽號つけられたものぢや、其  
 の己の毒氣を吹き附られた手前から迂闊すると一命まで  
 が無いぞト驚嚇して掛れと乗客も剛者アハ、と笑ふて  
 静に車上より下立ち。其方が蟻から此方の大蛇の六三さま  
 まだ手前の様なものに名乗も外聞が悪いが、巳の東京藏前  
 の産れ、外面の旅の行商と見せかけ道中かせぎの盗賊さま  
 だ併し近來の警察署の手入が厳正ので道中稼ぎも仕て居  
 られず、東京へ歸つてコソくと稼いで居るうち前夜芝口  
 の或る旅店へ忍び入り金と思ふて取たの大的ちがひ、笑樂



○第六笑

呆助奇薬を見認て道拙と争ひ  
痴能京師に飯りて放蕩を極む

八 變 子

呆助のちにゆるに今ごろ此所へ來りしかと云ふに今朝も芝口なる旅店にて痴能と袂れ途次尋ねる事ありて漸やく日影の傾くを見て東京の地を去り夏の夜道の涼しさにブラ／＼歩みを速ひて今此所に來るものあるが折しも怪しき服装の者が旅人の持物奪ふを見認め此の怪しからん奴と小陰に身を潜めて容子うがぶふに件の者が奪ひし一品こそ我が僞兄弟の痴能が盗賊のためには奪はれし大切の笑ひ藥ありしゆゑ何かの以つて猶豫すべき直に飛出して取戻さんとするに彼方もあか／＼剛者と見え呆助を見て

第 六 笑

カタ／＼と笑ひ。我れ此薬をもて一興行おし澤山金の儲かるまでの滅たに他人に渡さうぞ手前こそ左様お欺りを申し勞せずして此奇薬を奪はむとする者あるべし笑止を奴と罵るに呆助今のヤツキとあり。渡さすの渡さぬで宜し爲す事ありと腰に佩したる矢立をバ抜く手も見せず打て掛るを心得たりと道拙身を外し空を蹴せながら其の矢立取らふと爲るを呆助も左右あくの取せもせず兎角あすうち矢立より筆の出しを之れ幸ひと呆助執て差延べたる手先少しも誤たず道拙の顔眞黒に塗立るに道拙おほきに怒り立ち己れ憎くい奴と是も矢立の墨を指へ附て呆助の顔へ塗立しより双方眞黒を顔とあり茲を先度と挑み合ふ

八 變 子

にあか／＼果しあらざるゆる道拙二足三足まさり乍ら。  
 ヤア待ツた／＼手前の墨汁の甚はだ臭し、實に糞桶で行水  
 する様を思ひ、一体全体手前の何方の何といふものあるぞ  
 名乗て聞かせろと詰めよるに、呆助エへ、と笑ひ。我  
 こその原と西京の出生、事情あつて東京の住居、一度不時の  
 利益に、慾ばけ過たる、其後の小言をいとひエーデ、ンと何  
 やら分らぬ事やべるに、道拙噴飯し乍ら、こいつの／＼呆  
 れた男と腹かへるに、呆助の猶ほ。且しや是はどに饒舌  
 のに、呆れや左ほどに思やせぬと頭ふり立て吐鳴る可笑さ、  
 道拙いよ／＼笑ひに顔を去がめ。モ止て呉れ／＼腹の  
 皮がよれる様ぢや、然して袖振合ふも他生の縁、墨汁のけ合

第 六 笑

ふも亦多少の變、あんど物の相談ぢやが此所で兄弟の誓を  
 立て、私が興行する手術の口上演にあつて、臭ぬか何も別に  
 ひづかしい事あしと、頼むに呆助頭を掻き。ある程斯して  
 墨汁ぬり合ふも多少の縁ぢや、併し其の大切あ笑ひ薬のと  
 うする積りと問ふに、道拙うあづきて。兄弟の誓を立る上  
 の此の奇薬、其許へ戻さう、ヂヤが私も一度かうして手に入  
 た奇薬、暫く私に貸すと思ひ二人が利益の金を此薬から取  
 出さうでいかいか。ムーさうあれは双方が上都合ぢや、爾  
 ちら此所でヂヤンケンして勝た方が兄、負た方が弟とあら  
 う、サア宜しか、ヨイ／＼。夫や何ぢや私が勝たから私が  
 兄ぢや。エー仕まつた夫で、私が弟かと、呆助頭かいて。

夫の爾と口上演に親類あければトんと口上の演やう分らぬ、何と言たら宜らう。ナアニ雑作もあひ事一座高うの御ざりませれど不調法なる口上を以て申し上げ奉つりませ。『ヨ、イ、テ、ケ、テン、』コレ、さうませッ返しての困るぢやあいか『御市中の旦那さま方』。かあいませぬ旨者で御ざります、どうか慈悲を授けて一文いたゝかして下さりませ。また其様に混ッ返すワ『彌々』御機嫌能く在せられ恐悦至極に存じ上げ奉ります。但し病氣のお方の其方のけと致して。『随ひまして此度御覽に供しまする奇術の義の太夫道拙事多年歐羅巴に航て習ひ覚えし秘術に御座れば尋常の手工品と同様思召しなく能くお

八 變 子

第 六 笑

目を留て御覽のはと偏へに願ひ奉つりませ又たお口に留る奇術御座候らへば、何卒お手を拍されてお褒のはと是また願ひ上げ奉ります。左様々々彼方からも御用と仰やる此方からも御用と仰やる。コレ、夫でハ長井兵助にかッて仕まふ、マアさう混ッ返さすと一度やッて見るが宜いと云ふに呆助えたり顔して。それハ雑作あひ事先づ最初が『一升酒欲しうの御ざりますれど不格好ある小猪口を以て飲され申さすい』。コレハえたり、夫やア何といふ事をいふのぢや困つたもの。『マア黙ッてお聞き召れ』。『樹以て御市中大酒さま方ドロンケン能くお酔あらせられ恐悦至極に存じ奉つり升舌巻まして此許ベラシメ

八 變 子

「稱込まそ喧嘩の義の太夫道拙永らく酔仆にて習ひ覺えし喧嘩に御ざれ」お前へくめッ相もあいな事いふ男ぢや其様を事で迎も口上演に覺束あいな併し兄弟の縁結んだ上の是非のあいな事兎も角旅宿へ来て、二三日稽古して見るが宜いと道拙の呆助を伴ひ我が旅宿へ歸り行き是より二三日稽古するうち首尾よく口上も演る様にかつたゆゑ道拙も安心して口上を演してゐると話頭また一轉て芝口の旅宿にて果助と別れし痴能の久しぶりにて西京へ歸り金あるに任せ祇園新地あどへ入びたりナリカラ騒ぎよ現をぬかして居ると或日の事以前親しく仕たる阿彌邪九郎といふもの遊び先まで尋ねて来て、一別以來の挨拶すまし

第 六 笑

たうへ。借て私も近來東の洞院御池上つた所へ饅頭の店を出しましたからナト遊びに来て下され就ての兼てより何ぞ面白い事して猶ほ一層營業を盛んに仕たいと思ひ、いろく工夫してもトンと人を驚かす様あ方法もあく困つてゐる所へお前さんが此方へ歸りあさつたとの話ゆゑ相談して見たしと此所まで見さ。参つた次第、好い智恵あつたらナト貸して下されとの頼みに、何おもふか痴能のナルくと慥へ上り。エーモ一饅頭の事い言ふて下さるや、近來何様したものがトンと饅頭嫌ひにあり、饅頭のマの字聞いても身の毛が逆立と、又た慥へ上るに之の不思議と阿彌邪九郎膝を進め、近眼者が區役所の張出でも見る様に痴

能の顔を覗き込ただり

第七笑

阿喃計つて請状を送り  
痴能欺いて饅頭を喰ふ

阿喃邪九郎といふ男、痴能が饅頭さらひぞと云ふ顔ふしき  
相に差し覗いて。これに又た近頃妙事いはるゝものか  
赤蛇みて氣分むるうまたり、鼠みて顔えがめる様な人の世  
間に何ほと有るか分らねと饅頭と聞て怖がるもの滅たよ  
かし、何ゆる其様事いはるゝぞと不審がるに痴能彌く  
慥ひ上り。何故も彼の譯もかし、先ごろ東京へ登る途中函  
根の山中よて饅頭の幽霊に出會、其の幽霊が口許から鉛

ラくと流し茶がほしいと云ふた顔の恐ろしさ今おもひ  
出しても凄然とする身ふるひ爲るに邪九郎ふき出し。  
コレにマア面白い事云はるゝ、饅頭の幽霊との奇代を話し  
併し饅頭の幽霊見てから饅頭が怖くあつたとされるが一  
理ある所、夫で饅頭の事、モト言まはまい、ヂヤが一ツ賣  
込の方だけ何とか面白い工夫して貰ひたしと頼むに、痴能  
の承知えなれど。去迎お前さんの所へ行って品でも見ねバ  
ならぬ様な事での實に困るから品物見すと話の分る様に  
して下されと痴能のヤツと承知で。夫で四五日の中に  
何とか一考して見ませう、イヤまじめ話に坐が白けたサ  
ア、陽氣に一騒ぎ遣うと是よりヂヤンヂヤカ騒ぎ初め

出して暫くいたわいなく見えたり邪九郎酔ふた上の反逆  
 とて饅頭が怖いと云ふたを幸ひ一番痴能を困らし呉むと  
 何事か歸る姿視せて痴能と別れ直に其足で頃日入懸に  
 する芋粥變入といふ代官の方へ行き。我の知ッてゐる  
 先に斯々いふ者があるが何と其男を何方へ引ばり出して  
 一番饅頭責といふのを遣ての奈何であらうと談じかける  
 に變入も夫れ面白からう丁度私の家の隣家に明家がある  
 から彼方へ今聞た痴能とやらを引込んで裏表の入口閉き  
 り天窓よりお前さん所の饅頭の素より浴中にあるだけの  
 饅頭取寄せて投げ込ふでいかにとの勤めに微酔さげん  
 の邪九郎何ぞ否まう。是の妙ぢや實に面白しと雀躍して

入 變 子

第 七 笑

夫々準備に取掛りしが、情でせういふ趣向にして痴能を呼  
 出さうかと二人の相談のうへ送った左の如き手書  
 前文御高免下さるべく扱て過刻の御遊興先へ推参い  
 たし甚だ失禮いたし、就て私事御馳走に相成ひて歸  
 りがけ表書の處へ思はず足を送り込せ其まゝ今おは大  
 デレにデレ居りしが何分にも一人にて淋しく饅頭の  
 幽靈でも出せぬかと氣遣ひ居りしへ何卒御くり合  
 せの上この人車にて鳥渡御越のはと願上

涯西先斗町

鶯春亭にて

阿瞞邪九郎

芋塚痴能さま

月 日



そへがさして申上まをしあげいまだ見ぬ戀こひにあくがれ貴郎あなたに是非せひお目もじ致いたし度たぐとまをし居をるもの御座ござい得えバかあらずかあらず一寸ちよつとにても御越ごえのほとねんじ上あがいあらく

八

變

子

右みぎの手紙てがみ見ると痴能ちのうのグツと逆上のぼせ邪九郎よしく一人ひとりからバ兎ともかく我われに逢あたしと云ふもの有あるに顔見かほみせず居ゐて此この胸むねがと飛とだ風かぜがはりの伊左いざを極まこみ遊あそんで居ゐる青樓あやめへの斯か々々で先刻さきどき來きた人ひとから呼よびに來きたから一寸ちよつとと行いて來くる藝妓げいぎや幫間ばんげんの此こま置おが宜よろしとズツと大盡おほぜんと風かぜを極まめ込こむで迎むかひの人車にんぐるまへ乗のりガラくくと行いた先さきのいかにも先ま斗町とちやうあれど最いと怪あやしげあ家の門かみのへ人車にんぐるまを停とめたに是この不ふ

第

七

笑

思し議ぎと見廻みまわす家内うちよりサアア此方こちへ何ぞズツと邪九よしく郎出しでて迎むかへて云ふに痴能ちのうの不審ふしんあがらも中へ入いると邪九よしく郎門かど戸とビツシヤリ閉切とり其儘まま裏口うらぐちよりスツと拔ひて仕しまひ、又またた裏口うらぐちもビツシヤリめ切きり出でられぬ様ように仕して仕しまふたに痴能ちのういよく怪あやしく思おもふ折せから天窓あまどあけて投なこみ掛かけたの多おほくの饅頭まんぢう痴能ちのうびつくりしてキヤツと叫こび思おもえず其所そのこへドツと倒たるゝに夫おとを屋根やねより見みる邪九よしく郎と變八へんぱちの二人ふたりの興きようある事に思おもひ。ソオリーヤこれの虎屋とらやの饅頭まんぢうぢや。ソオリーヤ是この橋屋はしやのまんぢうぢやと續つけさまに投なげ込こむ中なかにての只ただだアレーくと叫こぶのみあれば二人ふたりのいよく面白おもしろく思おも

ひて猶ほ種々の饅頭投げ入れるうち何した事やら痴能の聲が去あくなつたゆゑ二人の眉を擡め。コリヤひよつとして死たので有るまいかと密と天窓から覗き込みに死ぬ所か痴能の大口開て。ムゝある程龜屋の龜屋だけ一番饅頭も好くて甘いと饅頭の味喰ひ分てゐたり

○第八笑

邪九郎の指揮に掛取青樓を襲ひ風流閣の屋上に両子勝惚を競ふゆるせく恐いくと饅頭なげ込む毎に痴能が大聲たてて叫ぶ容子のいかにも饅頭見るさへ恐ろしき様と思はれるよ邪九郎と變八是のいおもしろしとて調子よ乗て猶ほ手

當り次第饅頭を天窓から投げ入れ居るうち痴能が聲次第に細うちつて果のウンともスンとも言ぬ櫛にあつたの若しや目でも眩したので有るまいかと二人のソツと窓から内を瞰下すに言はぬも道理痴能の此方の饅頭チヨツと喰ての小首かたげ彼方の饅頭チヨイと味はふての舌打ちらし、龜屋の方が甘いと虎屋の方が宜とか無暗に喰分てゐるより夫を見た二人の顔見合せ。コレ變八さん彼様のマアどうした事だらう饅頭と聞ても怖いといふた男が如彼して饅頭喰ッてるの。左様何も不思議な事だ、去かし窮鼠かへつて猫を噛むと云ふ事があるから痴能どのも怖さが餘つて饅頭を喰ふのであらうと云ふ聲耳に入つてか痴

能、天窓の方見あげてニコニコと笑ひ。是の何れも眞に御馳走さま勞せまして喰ふありとの此事でござらうと濟し切て饅頭ムシヤ、此の状況に家根の二人おほきに呆れ、さして一番擔がれたものかエー口惜い、馬鹿らしいと足すりするよ痴能ふき出し。此位喰へバモウ饅頭怖くあし、此度の何やら茶か白湯が欲しく成たと冷笑する如く言ひあがら身を起して雨戸をち開け、以前の青樓へ歸り行きたり、然れば此方の二人のいよゝゝ残念ありと切齒しつゝ、屋根より下り、皆て何様仕たら宜らうかと頭を寄せて再び談合するに變入妙策ありと我膝うち。那の痴能とやらの餘程の舊借ある由おれバ其等の者を煽動して遊びある青樓へ立向

八 變 子

第 八 笑

はせ劇烈談判ひらかさバ奈何といふに、邪九郎も成ほど之ぞ妙策ありと即座に相談一決し邪九郎人を走て痴能が舊借ある家へ知せて云ふ様「此度芋塚痴能事東京表にて多くの金を儲け七八日以前に當地へ戻り昨今の祇園新地の云云したる青樓に流連の宴を張りあがら貴殿等への一錢の鳥目さへ返さぬ事甚だ不堪おれバ他人の痴氣を頭痛に病む次第ながら一寸御報知まをし上げしとの手紙を送りしより一同なにとて猶豫すべき各自に帳面持て邪九郎より知らしたる祇園の青樓目がけ押よせたる總勢およそ十一二人芋塚さんに逢ひたし痴能どのお目に掛りたしと、青樓の上り框に腰うち掛て動く様子あらねバ夫と見た痴能

八 變 子

赤面して、今までの大盡風何方へやら裏口あけてコッくと逃出したを夫と知らぬ掛取共、出て来ておはねば此方から逢にゆかうと支へる仲居藝妓を突のけ跳のけ、二階へドヤ／＼と駈あがって見ると早や痴能の居らず、居合す藝妓に問へば今便所へ往とて裏の段櫓子をお下にありましたとの事に。儲の早や風をくらって逃たもので有う、遠くに行きまい跡追かけてと、一人の男走りに掛るを、亦た一人が止め氣相かへて何方へ參る。エー以聲どころの騒ぎかへ、と突とばしながら出て行くに、殘の者等も亦た引き續きトツカハとこそ出て行く

四條小橋の詰に灘村屋といふ小料理店あり此灘村屋こそ

第 八 笑

痴能が西京へ戻つてからの遊び所にて祇園の花に飽く時の當家へ来て高瀬の細流に住む月を見て酔を醒すを例とあし居しが今しも我が遊び樓へ借金取の舞込しに驚き裏口より逃出しあがら當家へ來り一息ついて居る所へどうして知つたか又た借金取連が押し寄せ來て下の者等が支へるも聞あす早や二階へ登り來む容子に、痴能の早や是迄と覺悟あし、ホッと太息吐て見上る座敷の扁額に「風流閣」と記しあるに。其の風流閣の風流あらず、俗きはまತ್ತた借金取のためには我が苦しむものか儲もく、放果あいな始末と嘆じて見ても夫で己の顔汚しゆる此金つかへと扁額が金放り出してもせねば痴能も進退維れ谷ツて借金取の舌の劔

入 變 子

に身の切り亡はらされるものかと悲かなしう思おもふ折まから當家の女に房ぶが登あつて來きて屋根傳つたひに隣家へ逃にげよと云いふに痴能ちのの之これ有ありたしと女房にふし拜かむで窃そと屋根へ出でた事ことの出でたが棟高たかければ足ありななき、中々なか隣家の屋根へ下くだる様ようなし、所ところへ逃にげしてのとドヤ〜二階へ登ある債鬼ちがども、又また痴能ちのが居ゐらぬに落膽おちして、エー殘念ざんと足あする中なかに之この的中ちゆう屋根へ逃にげたに相違さちし諸子しよまゐれと先に立たて屋根へ出いづるに果はせるかな痴能ちのの屋根に在ありて一同の姿見すがたるより今いまの早はやや一生懸命しやうけん寄來きる懸取けんを待まちて或あるひの突つき或あるひの擲なり姑はしの間まの防ぼぎしが多た勢せいに無む勢せいのかなしさに次第たいに身體からだつかれおもはず足を踏ふすべらせてツル〜と迂まる機けに袂たもとから落お

第 八 笑

た一包ひとつかの向まに笑わらひ藥いしやくを泥棒どろぼうに盗ぬすまれし以來いらい心細こころさに堪たずして買かひ持もし噫藥いしやくあれば此この幸さいひに好よき物ものわりたり浩かる物もの持もしを今いままで忘われて居ゐたりし我わが身みあがらに失策しやくしと件くだんの袋開ふきあがら寄來きる者等ものらへふり掛かるに奇藥きやくの効能きゆうたちまち有ありて一人ひとりがハア〜と噫いすれば又また一人ひとりがハ〜と遺あらかし、各自各自ハア〜の競進會きやうしんかいをあし、痴能ちのに取とり掛かる擬勢いせさへなく互たがひ鼻はなを押おゆる計はかり、茲こゝへ後あとれて駈來かりし芋粥いもか八はち夫つまと見みるより屋根へ飛出といで噫い仕しかける鼻はなをヒン曲まげ寄よんとするを寄よせ附つき痴能ちのはげしく藥いしやくをふるに了得りやくの變へん入いるハ〜と噫いするを漸あく凌あいで組附くみづくに痴能ちのも斯かくあつてハ〜と奇藥きやくも詮せんなしと噫い藥いしやくを憂然うれと投捨なすてあ

がら暫時がほそひ挑み合しが、何思ふてか大聲たて。コレ  
 コレ待く此所で斯う争つての脚下が危い若し轉つたら  
 一命が亡ならう一命が亡なれば好き物を喰ふ事が出来ぬ  
 うへ彼妓の美顔見る事もあらぬ「顔見ぬ怨の糞焼よく」  
 亡者が三人迷アよつて一人の亡者のいふ事にや〜  
 と千松の真似して痴能が組附れた手を振はせくよ變八も  
 あるほど、思ふてか再び組附きもせず鶴千代と千松氣取  
 で「夫でいまだ拂ひが出来ぬかや」痴能さん未だ拂ひが出来  
 ぬかや「痴能のまた政岡の似聲つかふて」「エ、お前までが驚  
 しい其方代言の子でいかにか代言の子から道理よく知  
 ってゐるものぢや」と叱るよ變八「夫から斯して道理よく知



風流閣上よ二子勝惣を踊る

ツてゐる、痴能さん拂ひ貰はいでも金欲うかい」ト飽までも  
千松の身振、痴能の思はず大笑して。此奴のく面白し面  
白し、併し拂ひ欲うかいとの嘘であらう其實の金の欲いの  
オーがナア、チラアホア、見エ、エ、エ、る、アレワア  
いと勝物を踊り出した、變入もまた好の道とて共にオテ  
テのこれ、いサと遣り初め、双方夢中にあつてゐるうち互  
に思はず足踏外してコロくくくと川へ落けり

○第九笑

糞五兵衛怒つて蘇者を撃ち  
洋漢老醫却て生氣を失ふ

西京の高瀬川といへば東京のお堀より未だ細い内堀川、ホ

八 變 子

川の三十石船より揚た荷物あどを洛中へ運送する計りの  
 川にて折々の伏見邊の肥糞買ひ此の河岸に船をもやひて  
 食事安を妨害する事あり今日も一艘の糞船四條小橋の下  
 に来り船頭かね汲取人の糞五兵衛といふもの船かつぎて  
 市中へ出で糞汲み取たうへ船をつなぎし所へ来て見れば  
 船のいかいせしか其邊に見えず是の不思議あり是の不審  
 と河岸傳ひに下る事二丁ばかり漸う見とめた自分の船諸  
 の雨上りの水勢つよくて纜を断しと見えたり危い事危い  
 こと今少し後く歸らば既の事に船流失ふて仕まはふもの  
 にと喜びながらフト中を見るに提灯の火影暗うして確乎  
 とに分らねど肥料桶無慘にも覆轉り船中一ぱい黄金の花

第九 笑

其の中に何やら蠢動くもの有るに糞五兵衛おほきに驚き  
 船ひき寄せて見ると蠢く者の之れ二人の男にて是がお蔭  
 年にて有らば天上から人間が降下かとも思はふが眞可  
 天上から降た様でもあし、コリヤ何方から轉り落たもので  
 有う先づ兎も角も介抱してと鼻摘みながら船へ乗移りて  
 呼立て見るに早や息絶たとまでへ行ねど急に蘇生相も  
 なきに糞五兵衛も詮事なく其まゝ二人を乗て伏見へ下り  
 途中いろく介抱おしたる甲斐わつて痴能が先に息ふき  
 返したるに糞五兵衛よるこんでヤレく人心地づいたか  
 ど差よるを突き除け。手前等に負て堪るものが、ホラ、ヨイ  
 ヨイ、ヨイトサ「隣り座敷イを覗いて見れば枕二ツッー



に煙草盆ト勝惚を踊り出す騒ぎに變入も亦た人心地づき  
 て是れさへ、チヨロリヤ〜チヨンチロリと勝惚踊り、今ま  
 で、すら桶轉ら獲して汚れ切た船の中を又たメチャメチ  
 ヤにそるゝ兎まれ角まれ穢ない餘滴が掛るゝの流石の糞  
 五兵衛閉口して。コレ〜マアお前さん達の何さッしや  
 るのぢや一命ひろふて進せたら〜如此船中汚されて堪ら  
 うぞ、チト下に居て靜にさッしやれと制して見ても二人の  
 屋根より落て蘇生たを心づかず未だ屋上にある事と思ひ  
 止る糞五兵衛の横面をぐり附ながら猶ほヨイとサ、サッサ  
 と頻に踊り廻るに糞五兵衛も疝癪玉膨らかせ。こゝの間  
 拔野郎奴助けて遣った恩も知らず己の横面はり作しやが

八 變 子

第九 笑

ツたナ、よし〜此方も返報するから覺悟しろと天秤棒オ  
 ツ探て二人を打ち附たるに當り所や悪かりけん、二人のウ  
 ノと言つてハツタリ其所へ作れたに糞五兵衛ヤレ〜靜に  
 なツたと喜んぶが又心配仕出し。イヤ〜是や喜ぶ所ぢ  
 やあいぞ二人が亦た目を眩して仕まふた、併し氣を附れば  
 今の様に踊るし捨おけば此ま、冥途へ行き斯々で御さ  
 升と告るに相違あし、爾うある時ハ已が死だ時分極樂の蓮  
 の香嗅げぬハ定ッてゐる、ハテ困った事と暫くのうち考へ  
 て居たが。どう思ふても此ま、捨ておく譯にいかぬ、假令  
 蘇生せた所が往昔から踊るもの久しからずと言へば踊も  
 間もなく止むであらうと獨言て又た介抱するうち船ハ早

八 變 子

くも伏見へ着きたるに二人のあは蘇生さるより糞五兵衛  
 犬さに心を悩まし一先づ豊後橋の詰へ船を繋ぎ近所の甘  
 井洋漢といふ和洋折衷の醫師どのを招き二人の診察たの  
 みたるに洋漢老自ら樂箏笛提げて來ての診察左右するう  
 ち二人も漸う人心つさしと見え身を動し出したに洋漢ど  
 の鼻高うし。どうぢやノ夫れ此通り氣が附て來たと誇る  
 折からパチリと目を睨いた痴能、どうした事やら物さへ云  
 はず突然に洋漢老の胸ぐら執へて横面はり仆したる洋漢  
 老驚駭。コリヤ何をやるのぢや乱暴なと叱りつけるを耳  
 にも入れず痴能ヤツキとあつて。何をすると其方の胸  
 に問へ己を天秤棒もつて打ち附て置きあがら、と猶は打ち

第九 笑

掛るを糞五兵衛が支へ。コレコレ。夫れ私の間違ぢや  
 此の先生が何知つて、皆な私が悪いのぢや死せよと詫入  
 れども痴能おかく耳へ入れず。エ、器々しい駄つて居  
 るといふ下より用捨おくドシと醫師を打ち附け、トウ  
 トウ仆れさせて仕まふたに糞五兵衛いよく氣が氣であ  
 く痴能を其所へ引据て。お前のナアと愚痴こぼし乍  
 ら前からの次第を陳ると痴能も漸く事情が分り。諸の其  
 様始末で有たか、夫れ眞に氣の毒な事した、私のお前さんよ  
 助けられた事の知らぬが天秤棒で打れた時分初めて屋根  
 から落た事を思ひ出し是ぞ借金取に味方する奴であらう  
 と思ふた跡の何にも知らず、夫れ醫師どのをお前さんと

間違て打たのぢやが何の兎もあれ醫師どのも又た變入も  
一命を買戻して遣らすば成まいと、手當するに變入の頼て  
蘇生して是も前の始末を糞五兵衛より聞て借りと驚き我  
身の打れたるも忘れ再生の恩を謝そも可笑し、一方に變  
入の醫師どのを介抱すれど中々生氣づかぬに如何仕様か  
とマゴくなし居るを糞五兵衛見かねて。イヤ斯すると  
宜い金魚が死かけた時分よく唐辛子を呑と人があるから  
一番口や鼻の穴へ唐辛子を押し込で見ての事の之の妙  
法と變入手を拍て直に唐辛子を買いに走り、何程買つたもの  
やらコテくと唐がらしを買て來てサア服さうと氣絶し  
て仆れゐる洋漢老の口から鼻の穴へかけて無暗に唐がら

し押こみオ、イ、洋漢さまくと呼立る聲の通じてや  
ウソと身動きして目を少し見開きたり

○第拾笑

伏見の酒亭に懇親會を開き  
宇治の陋屋に三子顔を接す

洋漢が少し目を見開いたに便り得てサア先生氣をたしか  
に成さい、確乎に持て下されと呼合へと洋漢老の唐がらし  
嘗させられた辛さよ言へず口をムシヤクシヤ目をパチク  
リ、然れど夫と知らぬ三人の。モ、此位にあれば大丈夫、併  
し金魚でも唐がらし計り服しての良かぬ水も新らしいの  
と仕替ねばあらず其所で先生を裸体にして川へ浸すが宜

八 變 子

からうと之から三人寄って洋漢老の衣服を脱させ素肌にして淀川の水へ潤たから洋漢老びっくり仕てふるひ上り漸う唐辛子服だ辛さも忘れ。モ一太丈夫く何から何を飛だ厄介にありました是のホンの當座の御診察料にと醫者が懐中より五十錢の藥禮だしてスズく歸って行たに三人の奇妙不思議と拍手する中よ。あんと此五十錢で和解かた。何方かで一盃飲まうでないか、と糞五兵衛が發言たを何れも賛成して此の五十錢の上へ猶ほ各自些少づゝの錢あつめて之を持ち陸へ上り或る小料理店へ入つて酒麴を初めたるに酔た上の自慢話よ糞五兵衛鼻うごめかして。時に斯云へば自分の子を褒める様で宜しくないが

第 拾 笑

私の息子の愚文吾といふ村で評判の力弱夫ゆる角力が大好で此あひだも戸長さんの家で相撲のあつた時マア勇しい事に隣の權右衛門どの、息子で、年廿五、骨格の細ゆかしく、力の半人前といふので見ても褒たいほど弱らしい男とお前さんマア角力たと思召せ所が其の息子の始め斯いふ安排に私所の愚文吾の帯とツた、と痴能の帯とらへて引つけるに痴能迷惑さうに。成ほど、夫の勇しい併し私の帯執へるの、免して下され。イヤ免せどの卑怯未練か斯う立會ふてから免せもへちまも入たものか。これ、又た弱ツたナ何も私の帯を掴さくツても話しも出来やうよ、と言かへすに糞五兵衛も漸やう氣が注ぎ。コレ、免さ

八 變 子

つしやい〜ツイ話しに身が入て迂闊か前さんの帯とらへました、然して今した様に相手の帯を持ってグッと撥ぎ込れた。ア、一寸と待たう敵手の帯を取てグッと引よせたト夫のいゝが撥がれたと言ふのの撥いでドウと投たとの言違へたらう。イヤ何して〜決して言違ひでの御ざらぬ其所が弱い所を自慢する所で凡人に出来ぬ業ぢや、敵手の帯を執て引寄せながら投出したのから誰でも爲るが夫をドウと物の見事に投られた勇ましき、實にお前さん達へ見せたかつた、夫ほどの力弱ければ諸方から取組を頼みに来る事〜毎日〜必ず二人半ぐらゐるある夫ゆる双方いゝ事いゝもので自分も百姓をさらひ、どうか力士にあ

第 拾 笑

りたいた言張り、我も實の所今持て居る那の天秤棒の三代まで持ついたもので今さら彼品を他人の肩へ乗させるのの肥桶の手前も耻かしい譯ぢやが當人の嫌ひを百姓を無理にさせても後日ゴタ〜の起る基ゆる當人の氣に任せて力士にさせて遣うと思ふて居る事で見ればお前さん達もどうやら弱さうな容子連て歸つて悴に逢せたなら嘸ぞ喜ぶ事であらうがナンと斯して酒飲合ふも縁あれば是から一所に家まで來て悴に逢ふて遣て下さらぬか然して茲にまだ不思議な事に悴が生れた時分から一個の玉を持って居り其の玉に倭の字が現然と見えてあるの奇代事、いづれ成長したら立派な者に成うと喜んで居た甲斐が

あつて今日で家事の農業こそ嫌へ力の弱い事に掛て  
 此の近在に自宅の愚文吾ほどの者のあり升まい決して嘘  
 の云はぬ論より証據マア宅へ来て逢ふて見て下されと強  
 ての頼みに痴能膝進ませせて。來いと言れずとも是非往て  
 逢ふて見たい事がある、といふの外でも赤いが其の愚文  
 吾どのとやらが持て産れた玉のどうやら此方にも覺えが  
 あるゆる私の方から頼んで何うぞ面會させて貰ひたいと  
 いふ尾に就て變入もまた是の近ごろ妙事事聞くものぢ  
 や私も生れた時から其様お玉を持て居るので、サア見て下  
 されと懐中より持出した玉に珍の字があるに糞五兵衛  
 も痴能も俱に驚く中にも痴能の雀躍して喜び而て見れば

お前さんも私も皆お兄弟ぢや、その証據の夫れ此の通りと  
 出して見せたの呆の字ある玉見るより變入亦雀躍おし。  
 さて、飛だ事が縁となつて圖らず三人の兄弟を得た  
 といふものイヤ目出度く、目出度くの若松さまヨ。是  
 が不思議の縁ヤライヤアレ、コレ。コレ。コレ。お  
 前さんの様よさう大きき聲して困る、静かに。静かに  
 にちら無言でたいのむといふのであらうアハハハハハハ。  
 マアお洒落の明日の事にしてモ、大分おそろも成たれば  
 私の家まで歸ると仕やうと、糞五兵衛がいふに一同も去  
 と猪口を盃洗へ納め、舟へ戻つて糞五兵衛の居村ある宇治  
 へ行きしに愚文吾の未だ歸り來らぬとの事よ二變子もそ

れでの明日の朝逢ふと仕ませう本宵の互ひに勞れたから  
 と、糞五兵衛が心して設けし寐床へ入りて眠に就たり翌日  
 朝起ると愚文吾も戻つて居たより初對面の挨拶すませ、何  
 分向後親密の御交際あらん事をよろしく願ふと双方たの  
 み合たるすゑ愚文吾の區役所で問合しても在所が分らぬ  
 様お鼻速然に高うして云ふ様。お前さま達が來てお居で  
 と知つたら早く歸るんだつたが、喧嘩の仲裁してやつた和  
 解に酒を呑とじめて大層夜を更しました、尤も其の喧嘩と  
 いふのが普通の喧嘩でなく、双方あかく利ノ氣お奴なの  
 で實に閉口したが、ヤツと私が仲へ入つたので手が拍て一  
 方の方からの西洋紙薦を送り又た一方よりの紙張の虎を

送る事にあつたが、何も骨が折ました、どの事に二變子も夫  
 での双方とも賭博漢でも有るかと思つた。ナァーに一方  
 が十三にある小僧で一方が十二なる男と聞て二變子の  
 あるはどく

○第拾壹笑

屈野姿を變じて仇敵に近き  
 嘉平色に沈れて欺網に罹る

愚文吾の前夜した喧嘩の仲裁話を鼻衄めかしたつ、陳るよ  
 痴能と變入もあるはどくといふのみ格別感心もせぬに  
 愚文吾も面白からず思ふか。モ一話しの止さうく皆さ  
 んの耳へ面白う入らぬ容子ぢやから、とツンと濟すよ二變

子ハ驚駭。イヤ實に感心面白い事。拍手喝采謹啓。謹聴再拜話したまへ、語りたまへ。然らば猶ひさ續いて申して曰さく、小牡鹿の八の耳ふり立て聞しめせ。元來其喧嘩の發端といふの、甲者が焼芋を五厘五毛が所買ひに行くと後より亦乙者が二錢が所買ひに來り、順道踏めば假令五厘五毛にしる先、來た方へ焼芋賣るべきに芋屋で二錢といふ高に目を寄せ、其方へ焼芋を先に賣たから大變、甲者が承知をせずトウ。芋屋の店で喧嘩を蒸かへしたを通り掛つた甚太郎といふが宥めると此度のまた甚太郎との嘩喧もあり、既の事に怪我人も出來やうと仕たを漸と私仲裁で手が拍たのぢや、然して今日の顔つあぎの爲め私

が力の無い所を一度皆さんのお目も掛やうから、マアゆるゆるとして下され、是より自分庭へ下りて最と慢顔に持出したの壹斗入の醤油の空樽。サア見て下され宜いか。ホラ何です此くらゐで未だお目にとまらねハホラ。斯してと三才童でも輕々あげる様、空樽さし舉て汗ビシヨ。ビシヨとかく可笑さ、されど本人の愈々濟し切て。どうです斯して輕い物を持ち舉あがら汗をかかんと云ふ事、實に出來ない事だ、マア出來るから失禮ぢやが遣て御覽、あかく苦しい事ぢやと流る、汗を拭き、陳ふに此方の二變子も返す言葉があく、あるほど、と宜い加減にあらふを、愚文吾の又氣に入らずとて。サアそのなるは、と、



八 變 子

が腹に落ぬ、エライならエライ、感心から感心と断然いふて  
 貰ひたいナ。そんならエライと褒ませう。イヤ其様お褒  
 やうから止て貰ひませう褒るから奇麗に褒てはしい其様  
 から附の褒やうの有難くあし、と何いへば何様斯いへば斯  
 うと言争そふ丁得佞の字ある玉を持ただけ實に困った  
 事と二人の閉口して。爾からモ一何にも附ずにエライエ  
 ライ、ホイまた何の字が氣に入ぬと、夫でハムコヤ〜  
 エライ〜と何だかメチャ〜に褒立るゝ愚文吾やうや  
 う氣を恢復し、是より僞兄弟の誓約をするため小酒宴を初  
 めたるが其席にて愚文吾の變入と痴能も對ひ。時に御兩  
 子へ仕たい相談がある夫の外の事でもあいが私も斯して

第 拾 壹 笑

村内での評判の力弱、何かして力士に成り、世界中の奴に見  
 事あげられて見たいと思ふ、附け兩親へも相談かけて居  
 るのぢやが、丁度お前様達が來あさったこそ幸ひ、兩親を能  
 く説諭て下され、其かはり兩親が承知すると仲間を組で興  
 行に出かけ、お前さま達へ澤山お禮仕ませう、又た何なら一  
 所も歩いて興行の世話ねがひたしと云ふに痴能も舊借あ  
 る者等に知られた上の西京に身を置く事あらず變入も代  
 言こそ仕て居れ、ホソのモグリなれば是とて當時ハ太した  
 儲けもなく、反て愚文吾に同道して興行の世話する方宜け  
 れバ二變子共先づ同行する事を約しつゝ、兩親へ説立るゝ  
 兩親も夫はと思ふ事あらと承知したゆゑ愚文吾の喜び一

方あらず、日來相手にして投つけられる子供等を七八人誘ひ出して興行に歩く事とありしが其の興行地にて圖らずも那の道拙呆助等と出會ひ、種々の可笑味ある話の後、又説くとあし、茲にまた筆を更めて語るべき事あり新潟古町八番町に住む尾上梅三といふ俳優の本名を芋坂屈野とよび頑丈も男に似合す女形の名人にて常さへ化粧して服装を女に變ると柔しく見えるより、あかく評判よかりしが或とき髪ゆひ床へ髭剃に行しに來合し居たる一人の男が當床の主人に對ひ。アレハ何ぢや顔みれば俳優の女形らしいが足に毛の生た所や顔に青髭のある所はまるで車夫の鬚ぢやといひたるを小耳に挟み、彼もて其者の身分と

聞くも近在の商人との事に、ヨク夫でい得して遣る事がある、と獨うあづき乍ら歸つた後如何ある事をするか夫の暫く預り、當時沼垂とて新潟の市街を距ると二三里ばかりの所にちよいとした市街あり、此の沼垂の呉服商で萬屋嘉平といふの先ごろ女房に死別れ、獨り寐の床さびしきより程よき女もあらば、妾よして近所へ圍ひおきたしと出入の者へ頼みおくら、或人が來ての話に年齢廿二三もて極く好い妾が有るが御覽あさつて、いとこの事、嘉平よろこび、直に連れて來て見せて呉れ、と云ふに其男承知いたしたと歸りし間もあく又た來りて、夫でい本骨か目見えをさせますが、若しお氣に入ら先づ拾圓許り手當として下さ

るやうにと頼むを主人よしと事もおげに承知した上  
 近所の橋本屋といふ料理屋へ登り其所へ女を連れこませる  
 約束にて待てるうち例の仲人が来り今直に後から本人が  
 参りますゆゑマア一つお酌と徳利執つて酒すゝめるに常  
 の餘り飲みぬ口あがら今日の内うれしさに嘉平も猪口と  
 ッてグイグイ飲つつけ頼て妾のお浅といふが入來し頃  
 早やへレケにあり。イヨこれの美ツイ事くサアく  
 さう耻しがらずとズツと此方へ來て、イエサ何も其様に  
 隅の方へ小さく成て居ないでも宜ぢやあいかコレサく  
 と立て無理も手を執うとするを仲人の某が隔て。これの  
 あたり貴郎の男の事ゆゑ何も構はねど女といふもの初

めて逢ふた方に其様あれくしう出来るものであり然し  
 て又た例の一件も未だ濟ねばといふ嘉平合點き。成は  
 ど其の忘れて居たサア是だけ呉てやつて呉と投出した金  
 の廿五圓、仲人此方むいて舌を出しおがら其金もッて妾の  
 おあさを小蔭へ呼び何か暫く話し居たが妾のみ遣して自  
 分の座を外し顔も下へ降た後に嘉平の耻かしがるお淺の  
 手とッて側へ引する様と爲るとおあさの愈よ耻かしがる  
 態見せて頬の邊を嘉平の手へ摺附ると同時に嘉平のアイ  
 痛いと叫び妾の顔見て又たアッて叫びぬ

○第拾貳笑

俳優、骨牌を取替へ  
技師、反て欺罔の裏缺く

八 變 子

嘉平が執る手をお浅の我が頬へ當てすり立しに女の頬に  
似合す痛いといく、茨の垣に手を觸れた様おれ、何か、以  
つて堪るべきアイマ、、、、、と言あがらお浅の顔を  
見てびっくり。ヤア、奇麗お女とおもひの外、その頬、髭  
の何した事、男で鐵漿つけたお公家さまの有たが頬に髭の  
生た女の今日見るがとじめて、コリヤ色氣も何も失つて仕  
まつた、と喚きたてるにお浅の、カラ、と笑ひ。ヤイこ、  
お嘉平面、まだ已を女ぢやと思ふて居るか、サアこれを見る  
といふより早やく衣服の裾、ルリツと捲り上げ、出して見

第 拾 貳 笑

せたの毛だらけの足、嘉平いよくびっくり仕て。それで  
の貴様の女でないのか、女でないのに何故そんなお服装して  
已を馬鹿しに來せたのぢや、サア事情吐せ、事情聞かうと、扼  
腕してすり寄るに、お浅のゆるんだ越中ふんどし引しめ乍  
ら。聞せて呉といふ迄も、あ、聞ぬといふても此方から聞  
せるのだ、ヨモ忘れのすまい、いつぞや古町八番丁の散髪床  
にて、己が髭すりに行し、彼様でも女形かといふて笑ふた  
覺えがあらう、どうで男が女にあるのなら、其まゝの顔で、  
おらぬと、それに己が素顔を見て、笑ふおど、の奇怪千萬、ま  
づ試に神主や僧侶を見よ、身に緋の法衣、殊勝に着あし、珠數  
勿体ぶつて操るがゆる、エ、有りがたい生佛さま、と婆の

や、爺どのが泪を赤がして拜みもするもの、若しや夫が裸  
 躰であつたら、どういふものか、真可腹からして有難がり  
 爲まい、又た神主どのも白衣も下垂着て勿体がほに祈言あ  
 げす、敬神家の頭も下らざるべし、俳優として此と同じこと  
 ぢや、巳の素顔見て笑ふた手前の僧侶の裸躰見て笑ふたも  
 同じことぢや、併しわらはれた巳も斯うして女ど化け手前  
 をアレどさせたで實に溜飲の出が下ったやうか思ひ、再び  
 あの様も笑やアがるど此度の其ま、置かさいヅ、サア歸れ  
 今日免るして遣る、今日一命をくれて遣ると足ふみ鳴  
 して追立るに、嘉平の大きに立腹あし。さつての手前  
 つぞや古町の散髪床にて見たるアモ俳優ありしか、それと

の知らず一番暗々かつがれしか残念至極と拳を握りて口  
 惜がるを見やりて猶さらうち笑ひ。口惜まぎれに未だ巳  
 の事をアモ俳優あど、いふか借もく、笑止か奴、己の當時  
 越後で誰えらぬものあき尾上梅三といふお俳優さまだ。  
 ナ、お俳優さまだと、へんお百姓様が聞いて呆れらア、手前  
 等の顔へ白粉塗る序に衣服へ糞でも塗った方が宜しから  
 うと減す口あらべるに梅三の屁野も憎くい奴と顔睨めつ  
 けて。巳れ其様あ事をすか、身の女形でこそあれ手前の  
 様なもの一人や二人の何でもあし、サアどうするか見やア  
 がれど、嘉平の襟元とつて引擔ぎあがらエ、聲かけて二三  
 間彼方へ投出したに、嘉平の柱で頭コツリ。アイタ、ハ、ハ、

八 變 子

コリアひどい目に遭はしやアがる、アイタ、と腰さ  
 すり乍ら起も上れず。エイワく、今にまた此返報のする  
 グ、アイタ、と頻りに顔をかめ乍ら再び手出も得せ  
 ずして其まゝ逃かへりしより屁野の小氣味よしとて先づ  
 手酌で二三盃かたふけたる上、悠々と仕て當家を立去し容  
 子の能くいふと八重桐の様で、悪くいふと言やうに止度が  
 あく何れにしても茶番の二字の外れざるべし  
 却説屁野の首尾よく復讐てよるこふ甲斐なく呉服屋の主  
 人嘉平が金にわかせて屁野の事を悪さまに流布せしゆる  
 今の屁野も人氣ハツタリ地に落ち新瀛に居れなくあつた  
 より口惜ながらも當地を去り先づ東京へと志したるが其

第 拾 貳 笑

ころ丁度信州長野に興行して居りし市川瀧三郎といふ俳  
 優の連中ありて、屁野の梅三も此の一行に加とる事とあり  
 興行してゐる所へ出て來た興行もの西洋奇術との觸込  
 にて化學作用の手術あるが鳥渡と目前の替つた事をする  
 より西洋手術と評判たかくなり、之がため瀧三郎の演  
 劇が人足すくはれ思はしく觀物も入らぬゆる芝居が、り  
 の者の手術の太夫元又怨を含み、何とかして向ふの入を無  
 する様に仕たいと思ひ、いろく考へたがフト一策の法略  
 を胸に浮べ、或時瀧三郎みづから姿をやつして手術の見物  
 に行き、やがて太夫が配らせて歩く骨牌を一枚ぬき取り、そ  
 の骨牌を兼て持て行し外の骨牌と窃かに替へ取りあつめ

に來た時分に取替の方を渡して遣り、サアこれで好妙、今に  
 太夫めの骨牌まぢがふて笑はれやうと喜んでゐたが、是よ  
 り又た一つの笑ひ話こそ初まれり

### ○第拾參笑

芋山道拙面目玉を踏潰し  
 芋坂屁野獅子鼻を高延す

市川瀧三郎の窃と取替た骨牌を集めよ來たものに渡し、今  
 に見ろ間違ふた骨牌出して太夫が吠面かゝうと、心嬉しく  
 待て居るうち太夫の集めた骨牌を看客も眺し。サア御覽  
 くだされ、只いま集めた所のかるたを斯いたして幾度とあ  
 く切まして、彼ある箱へ入かさしますが、その中より看客が

見とめ置きにあつた骨牌が首尾より出ましたから何かお  
 手をお拍きのほと願ひまゐると口上述べたうへ、何か怪し  
 き唱へ言して、出ると云ふ掛聲に連れ、ヒューと現れ出し、  
 疑ふ方かく甲ある客が取し骨牌ゆゑ、甲客の我を忘れて拍  
 手する音のまだ終らぬうち又もや太夫の聲に連れてヒュー  
 と現れし乙の客が見覚えある●の骨牌あれば是も當り  
 して乙客が拍手喝采する後より又現れ出た、ワヤツツ  
 の札、丙の客見るより當つたり、妙々と叫び、その賞聲消えの  
 こる中に續いて現れたるハッホッよて何れも當り外れぬ  
 ゆゑ見物一同ふしぎくと呼立るに太夫の低い鼻うごめ  
 かして有がたしと幾度か禮拜し偕て笑ひを合んでいふや

う。お蔭をもちまして首尾よく骨牌が當りまして御ざり  
 まさるが時に世の事へぬもので一番あつとへ残りまし  
 た骨牌がまをし升よの私に身代りよ入られたので本當の  
 かるたで無い、それゆゑ皆さんのお目通へ顔を見せるが耻  
 かしい、ト斯やう申しませどが、それぢやと申して其のまゝ置  
 く譯よの参りませんから、夫で顔だけ掩して出るが宜ら  
 うと申しつけましたから何様な物を被つて出ますか其所  
 のトンと分りませぬが、何にいたせ是の看客様のいたづら  
 で御ざれば、何様なものを被つて出ましても御當人が御立  
 腹なさらぬ様よ願ひませると、断りの口上述べた後、前のと  
 とく『ピヨリ』と出るの聲に随つて『ロ』と箱より

出た一枚のかるたの反古を被つてゐるゆゑ、看客のまた一  
 同ハッシと拍手して褒るに、反對市川瀧三郎のヌツカ  
 リ己れの欺罔を看破られ、此上いかある事をとるかと思  
 易からざる折から、太夫の骨牌が被りて出でし右の反古執  
 ッて聲高らかに讀むげのやう。『まかれバ此程より手紙を  
 もつて度々まをし上げさふらへども今もつて一言の御返  
 事もあく實の當方も入費おほき中に、外の御方と違ひ親方  
 の事ゆゑ無理に催促もいたさず居りさふらひしに夫と  
 さッしもあく真まゝ、呆れ入つたるあされ方、明後日の夕  
 方まで少しでも御入金なき時のよんどころ無く其筋の  
 手をわづらはしむひだ、せひく日限の中は少しなりと



も御入金のはと願ひあげん云々と讀立しの我身へ當た青  
 樓からの催促手紙にて、前はどまで袂にありしに、借の太夫  
 奴が早くも此方の裏をかいて何日の間にか袂より取出し  
 たものかと思へば、灘三郎も身の悪さの棚上へあけて太夫  
 を憎しと恨めど、今さら云ふて返らぬ事ゆゑ其まゝ他人の  
 笑ひを後にのこしてスゴク我家へ戻りゆき、屁野等も有  
 し事件を語りて太息つくを聞くより、屁野の口惜がりて。  
 ヨシ／＼それでい私が一計畧して見ませうと種々かんが  
 へたそゑ翌日は是れも服装を變へて手術を見に出かけ、やが  
 て太夫が御見物より紙幣を拜借いたし夫を彼なる箱へ  
 入れおき姑しの間に又も皆さまの袂へ自から御戻しませを

す奇術よて首尾よくまゐりましたから何かお褒めはせ  
 願ひまするト口上のべたるうへ自分で見物の側へ来て金  
 を借歩くに、屁野の技を五十錢紙幣一枚い出して渡すに  
 太夫の受取て左の手で持たとの觀者を欺く手段にてその  
 實の既に借たる紙幣の出したる當人の袂へソツと入れお  
 き左の手には豫て洋服の隠し潜めある替玉の紙幣を出し  
 て持ち夫を借たる紙幣と見せて客の目をくらませる者ある  
 が、屁野の斯くど種を知るがゆゑ今しも太夫がソツと我が  
 袂へ入れた紙幣を出して豫て謀し合せたる男に夫といひ  
 のけ、彼方へ遣りしを爾うどの知らず太夫の集めた紙幣を  
 舞臺の上手に飾りし箱の中へ入れ例の如く暫時何事か唱

へたのち小銃いだし物々しう一發彈ち得意顔して右の  
 箱開くに原より仕掛たる事なれば中よ金のあらう筈あし  
 然れば失たる紙幣の前に陳たる如く出した方の袂へ戻り  
 居れば何とぞおあらため程ねがひ升若しありたる時  
 何日あがら拍手のほど願ふと陳る下より紙幣出した人等  
 の各自に袂かい搜るにアラ不思議やいづれも目に覺えつ  
 け置きし紙幣のチャンと入り居るゆゑ是の奇妙あり妙あ  
 りと叫ぶ中に屈野のズツと立わがッて。私の袂に太夫  
 のいふが如く紙幣もどり居らず併し其の有り所の能く知  
 り居るがゆゑ申し上んに私の出したる紙幣の反て太夫の  
 側は居る口演者の袂にありと思ひ懸あい發言よ見物の不

思議がる、太夫の驚く、中よも口演者の何を吐すやらと吐き  
 ちがらも若しやと思ひツツと袂へ手をさし入て見るに、ア  
 ー不審や客が云ひし如く、何やら裂の中に紙幣包みし  
 と思ふ者のあれの驚駭してウロウロあしるるに太夫も心  
 が、りありと差し寄てあらため見るに奈何にも紙幣の包  
 あつて爾も其の包みといふの古びたる越後禪なりしゆゑ  
 太夫の面目玉をふみ潰そ、観客の噴飯す、屈野のさまア見や  
 がれと言ぬ計りに大手をふッて歸り行きしに、あれ何者と  
 太夫の聞くに彼こそ此度瀧三郎の一行に加はりて興行な  
 しゐる尾上梅三といふ女形なりと教へられ、諸の前日の復  
 讐よ來しものかと初めて仔細を知りしが、知りて見れば猶

のこと此まゝ濟せぬ次第あれば、何とかして彼奴等も吠面  
かゝしたしと一座の者が頭やませて居る事を土地の俠客  
ある某が聞き、斯くてい双方の爲め悪しと仲へ入ッていろ  
いろ寛めたるゆる双方も得心して事あら立すに濟みたる  
計りか爾來の懇親をむとふ爲ど一同の或る料理屋へ頭を  
寄せ大宴會を開きしが其席にてフトした事より太夫と口  
演者と屁野の三子が名乗あふ事となりしに此の太夫とい  
例の道拙、また口演者の呆助なりしゆる三變子の即座に偽  
兄弟の約をどゝのへ是より屁野の瀧三郎の一座を脱し道  
拙の行も加はり手術の間に手躍なぞ見せる事になりたり

○第拾四笑

舊を説ておひし不幸の身を歎き  
門を閉て作太郎無法の行を修す

こゝよ又た山城の宇治ある芋田愚文吾の宅へ落合たる變  
八と痴能の圖らずも愚文吾と兄弟の縁を結びたるうへ愚  
文吾が相撲の興行なし歩くも連られ諸所方々經めぐりし  
後紀州の和歌山へ流れ込み晝間の相撲場の世話あど爲し  
夜の暇のあるまゝ丸之内の失場なぞ素見し居りしが或夜  
矢場にての話を開くも近ぶる築地邊へ白鬼數多出で往  
來ふ人の金うばふとの噂あれば、變八甚はだ面白きことに  
おもひ。我生れて未だ鬼といふもの借金取の外に見た  
ことなし、築地邊に奇麗な白鬼が徘徊するといふこそ幸ひ

是非行きて見たしといふに居あはす者等の笑ひて。さて  
 もくお前さんの物好きな人か我等の錢もらふても白鬼  
 の側へ行く事恐ろしく鼻の掛がへあい中らッかり白鬼  
 よ近づけぬと身ふるひ爲るに、變八鼻頭でウフ、と  
 笑ひ。我れ何事に寄らず珍らしき事好にて、白鬼の生物見  
 るこそ身の本懐といはん、原より白鬼とあらば變化のもの、  
 見て怖くもあらう、恐ろしくもあらう併し高が知れたる白  
 鬼あらずや、假令いかほど荒まるとも此の變八さまを八  
 裂よして、葱と一所にすき鍋でシツク遣ること、ヨモ出来  
 まじ、恐るゝ時の雨降に外出する事も難く、怖がらぬ時の幽  
 霊も長夜の伽よあるべし、何の懼るゝ所かあらむと止める

八 變 子

第 拾 四 笑

も聞ず其家を駈け出し築地と聞たを心あてぬいそくと  
 して行く折から傍の材木の小蔭より立あはれし一人の  
 女變八の袖ひかへて、モシくといふに、變八キツと立とい  
 まり頭の先から足の先まで念入れて見下し。さてもく  
 書にかいた鬼と違ひ正物の實に奇麗なもの、そして角とや  
 らいふもの何所にあるのかトンと分らず、開化にあつて  
 鬼の容子も大分かはつたと見える、何にもいたせ彼方から  
 誘ふこそ幸ひ其の窟へゆきて見むと引るゝまゝに隨ひ  
 ゆくに築地の川岸端ある或る小やかなる家へともあひし  
 ことの伴あひしものゝ左も耻かしさうに爲しゐるゆゑ、是  
 の我が手剛を知つて斯も柔しく仕て見せ、若し油断あさば

八 變 子

直に大口あいてムシヤリ〜と喰て仕まふものあらん。汝等の牙よか、ッて生肉くはる、やうな弱者でいなし、ッてかり爲ると此方から手前の身體を引裂てヌタにして喰て仕まふぞと居合腰していふよ、白鬼のブル〜とふるひ上り、まッ白に化粧した顔、あかば青くして。アレマア貴郎としたり事、飛でもない事おッしやります、妾のさやうお怪しいもので、御ざりませぬ、トばかり申したからとてお疑ひの晴まそまいから、今お疑ひが晴るやうに身が履歴の一通をお話しをせば、おうるさくもお聞きあされて下さりませと、いふも早や目に涙を浮べ。實の斯やうで御ざりませ、妾の原と匠町の丸輪四角といふ者の女房で名をお變とま

第 拾 四 笑

をしますすが夫四角事、昨年より新地の藝妓三毛吉に現をぬかし、數多の金を湯水の如く浪費はたせしうへ、その三毛吉を家へ入れ、妾が身に出てゆけと言ぬばかりの所爲、妾も口惜うにおもへど根をあらへば縁附た身のかなしさ、口やかましい事もいへず、涙をのんで凌いでゐると、夫をいゝ事にして愈よつれあう當られるよ、妾も今の辛抱仕かね、當家を飛ばし、姑くの間、知己家を彼方此方と歩き廻り、やうやう送ッて居りましたが、いつまでも爾う斯う他人の世話に寄ッて居る譯も行かず、夫ゆる晝間の諸方へ雇はれて、注ぎ洗濯あど爲し、又た夜になるとお耻かしい事あがらト

いひかけて後の涙變入委細聞取て氣の毒なり。さてい  
お前を白鬼とおもふたの間違であつたか、そして今の話を  
聞けバ實に貰ひ泣が仕たい様もあつた、ついでに其の三毛  
吉とやらいふ猫の憎みても餘りのある奴、此まゝ捨ておけ  
バ家まで皆喰ふてしまふであらうから、今の間は何とか  
工夫して其奴を放逐す様に仕たいものぢやが、而て該家よ  
の息子どのも何よもあいのかど云ふにお菱の聲くもらせ  
て。ハイ何でござります、家にて作太郎と申す立派な男の  
子でござります、これの妾の實の子で御ござりまするが兎  
かく贅澤な事を好み、紀三井寺の邊へ別荘こしらへ、其所へ  
ばかり入つて無法の行といふものを爲し、誰が意見しに往

ても聞入ぬばかりか果のうるさしとて戸を閉て人を寄せ  
つけず、然れど我身が持ゐる此の洒落小帯を証據おして面  
會求め、根が贅澤な者ゆる洒落た帯見て心ゆるし膝近う  
寄せてお話をす事も御ざりませう、爾うなれば何を妾が  
斯うして難義してゐる事を話し何か那の三毛猫を退治る  
やうな願ひをしますると涙を雨のやうな流して頼む  
を聞き終つて變入うちうなづき。袖ふり合ふも他生の縁  
屹度その三毛猫退治つけてお前さんの心が安まるやうに  
仕て上やうから、必ず迷はぬ様に仕させられ私も男ぢや一度  
斯うと受合ふたうへに決して嘘いつそり言はぬと幾たび  
かお菱をおくさめおがら當夜の別れて宿許へ歸り他の二

八への態と前の次第を語らず、また翌日の少し用事ありとて相撲場の事を痴能にたのみ自分のおひしより聞きたる作太郎の許に訪れむと紀三井寺さして至りしが作太郎の近ぶる買家がゴマ／＼するを面倒と此の紀三井寺の邊ある別荘に籠り無法の行とて贅澤の奥秘を考へ居りて我が妻の訪なひ來るも夏蠅とて面會せず、今日も今日とて女房皺衣の夫に意見せんものぞと來りて見れば垣深から閉て開くべき様なく、是のお情おかし嗣慾おと力に任せて扉を敲けど、中に作太郎が端歌を義太夫に直したるを節おもしろく諸ふ聲のきこえるのみよて返事の更にあらぬより皺衣のいよ／＼氣が氣であく延つ透しつ内を見て、さッても

薄情男奴と口で強く目よの睨くおみだに袖をうるはし居たり

○ 第 拾 五 笑

涎小帯に掛りて芋の筋を舐し  
變子猫を退治て家の禍を断つ

おにはおを歎いても内より開よ出て呉れる容子もないよ皺衣も今は是までありと早や覺悟きはめしが、オーさうぢやと馳ゆさかけるを前刻から小蔭に在て始終見て居し變八走り出て緊と引きといめ。コレ／＼お女中待った／＼和女が前刻からの容子を見て事情のあらましの分ったが去とて死なうおと思ふの所存が足らぬ、マア兎も角も私よ

八 變 子

まかせて置なさい私も實の少し仔細あつて作太郎どのに  
 面會よ來たもの假令作太郎どのが逢はぬと言ふも逢ふ  
 様にさせる手段がある今にあはさせて上やうから始しの  
 間小蔭に身を潜ばせ私がする相圖を待つて居かされ、そし  
 て相圖のオホンといふ咳ばらひぢや宜しか+私の逢ふ手  
 段があるから屹度お前さんにも逢して見せうと、かたき言  
 葉を誓ひ、敷衣を小蔭よ潜ばせながら垣の側へ立寄りホト  
 ホトたゝきて訪へど、内に作太郎が無法の修行最中、天津  
 乙女を迎へて踊りの稽古する時の下稽古あとして居り、あ  
 か／＼人に面接す所であし、それゆゑ變入も詮事あさに門  
 の垣むりよ押破つてニユリツと内へ入り、前にお菱より預

第 拾 五 笑

りし洒落小帯で頬冠りあし「變入や敵けと作太郎門あけず、  
 夫での垣根を毀さざるまい、ガツマリハツサリ、ガツマリ  
 ハツサリ、向ふの小暗き座敷の小蔭に無法の修行者、贅澤さ  
 はめる、腹立てさせるも意見せざアあるまい」と權兵衛の踊  
 りで入りゆくに了得の作太郎も膽を潰ふし。こいつの奇  
 妙々々、そして洒落た錦の小帯で頬冠り仕たあど、實に贅澤  
 きはまつた事ぢや、マア静よして何方の何といふ者か名乗  
 れ聞んど膝すり寄るよ、變入得たりと喜び上り。オツとさ  
 うなくつてのからぬ筈、借て拙者の美日さす西京の住人、芋  
 粥變入といふもの仔細あつて和歌山へ参り暫し滞在あす  
 うち此ほど云々の場合より貴殿の眞實の母御に逢ひ、是



八 變 子

より前の次第を漏なく語るに、作太郎聞いて大さよ驚き。それで母上家に、ア、辻君にまでと言ひあがら涙ぐみ。實の母上家出の後、其の行方を探してゐるに未だ手掛りさへあきゆゑ困はて、居たり、夫にはからず今お前さまより所在を聞き、此上の喜びや有べき、斯も所在の分る上、明日にも我が別荘へ引取り、孝養を盡さん、ついでに母を喰ひ父を喰ふ、那の三毛猫を退治て呉れむと力む機にどうした事やら笑ひもせぬに、口の邊へ涎つたひて前に置たる洒落小帯に掛ると同時に變入もボクくくと涎くり落ちて、件の小帯へ掛けたる不審さ、互ひに是の不思議ありと膝より寄せ、斯も笑はず能弄戯すして双方の涎はつる事

第 拾 五 笑

因縁あらむ、若しや貴郎の身に黄色き玉を持ち居られざるやと變入が聞くに、作太郎うあづき。いかにも貴殿が云はるゝ如く我れ産れ落るより贅の字あらはれし、一個の黄色き玉を持ち、然して我に其の玉の事尋ねらるゝ上から定めし貴殿も我と同じき玉を持ち居らるゝならん、疾く出して眺されよと急込に變入い愈よ喜びて。貴殿が云る如く我も黄色き一個の玉を持ち、それ見られよと懐中さぐつて取出したの珍の字ある玉なるゆゑ、備へる玉を持つ人まだ外よもあらんが、我が只さへ贅澤を好むに今珍と贅との二字より集らす他の者等を有り知りつゝ、餘所よ過すと本意ならず、何卒金積み上るとも一同を此の

八 變 子

別業に集めて酒飲んで見たしと、遺憾がる作太郎を制して  
 變八鼻うごめかしながら。イヤ作太郎の左のみ心配さ  
 れぬが好し己れ不思議にも既、呆俊の玉を所持なすもの  
 二人と偽兄弟の約むすびありと、慢り立よ作太郎も。夫の  
 此上もあき幸ひあり、然れば急ぎ其の人等を此席へ招き寄  
 せ給へ、といふに變八頭を掻き。さらばとあり他の二人  
 の云るの事情あつて和歌山へ居れば今直といふて呼寄る  
 事ならず、今日二日の猶豫ありたし、其中に予一先づ和  
 歌山へ歸り他の二變子へ事の次第を語りて此所へ連まる  
 るべし、夫までの辛抱ねがふ、と頼むに作太郎も、やうやう承  
 知して。其様あらば一まづ和歌山へ立かへりて、他の二人

第 拾 五 笑

を連來られたし杯と約束かためる其間をエー待どはいぢ  
 レッたいたいどモチくして居る皺衣の事を變八トンと忘れ  
 て仕まひ、相圖の咳拂ひ仕さうもあいに、皺衣いよく堪へ  
 かぬて反て自分の方よりエーンくホンくと爲る咳拂  
 ひの聲聞く變八何おもふか門へ駆出で。エー逢ひたかッ  
 たくど袖に縫るを見て皺衣吃驚。ソリヤお前さん何に  
 を云はしやんす逢ひたひとの妾のいふと、先刻から待ても  
 待ても相圖がおい故此方から咳ばらひ仕てお前さんがす  
 る咳の催促仕たンぢやと言れ、變八はじめて夫と心づき。  
 あるほどくコリヤ私が間違ふた實のところ作太郎どの  
 と仕合ふ話に身が入てお前さんが待てる事を忘れてゐた

八 變 子

所へ咳ばらひが聞えたから俄にお前さんの事を思ひ出し  
 うっかり自分までがお前さんの氣にあつて駈出したのぢ  
 や、眞にどうも大失策だと頭を掻いて据ゆるぞ可笑し、皺衣  
 も容子聞いて打うあづき。それでモー入つても大事あ  
 からうと内へかけ入て作太郎の膝に取つき。コレマアお  
 前さんと仕た事の彼はどいふに未だ妾の意見を用ひず、仕  
 たい儘ある贅澤三昧夫も心配のさい時なら兎も角、母さん  
 の行方が知れぬ歎きの中で無法の行との何事ぞ、エーモー  
 分らぬ成され方と疊たゝいて意見するに、作太郎耳かしま  
 し、とて両方の耳の穴へ紙揉んで堅く詰るに。それで  
 餘りぢや、意見されるも皆お貴殿の身のため思ふての事、其

第 拾 五 笑

標素氣あふ仕たもんで、コレ作太郎どのイヤサ作太  
 郎氏、是は云ふに返事せられぬの何様した事、子のいふ事  
 氣にいらぬのかと怒つて見て心づき、イヤコリヤ聞えぬも道  
 理、返事のさいとも尤も耳の詰紙が取てないからぢやアハ  
 ハ、と變入差寄つて無理に耳の詰紙とり捨て皺衣と  
 共に意見するよ女房ばかりあら兎も角も、兄弟と誓ふたる  
 變入どのが爾う意見せられるを用ひぬと云ふて、仕た契  
 約の手前も憚れば屹度仰せを服膺て爾後贅澤あ事の努い  
 たすまいとの答へに變入も大に喜び。夫でこそ意見の仕  
 甲斐があるといふもの、ソリヤ爾うと私に是より一先づ和  
 歌山へ歸り二變子の者へも委細話して喜ばせませう又た

触衣どのの此所に居てと目尻で知らずは触衣の今さら恥  
かしさうに顔赤らめ、差し俯きしまゝ返事もあし、變入さ  
そと笑ひあがら立ち上り。『さらば二三日中にまた逢ふと  
夕暮の空うち仰ぎ悠々として歸りゆく』と淨瑠璃の節をか  
しく吐鳴に作太郎も浮れ。門前までのデ、ン、デ、ン、  
寸其所まで送り三重と洒落あから送り出しける

### ○第拾六笑

熊の子と聞いて美女逃げ  
虎の子と聞いて土人圍む

宮城ある仙臺國分町の片ほとりに住み小間物を商ふ幸江  
珍兵衛といふ若者あり此の珍兵衛はなと目尻の下た男に

で無暗やたらと女にデレ込み夫がため可ありの身代をメ  
ナヤ／＼に打き上げて果の土地も居難くあり此上の北  
海道へでも航って甘い金儲けを仕やうと先づ石の巻へ行  
きて便船を求め函館へ航ったうへ新米の泥棒が留守家で  
も狙ふやうに程よい銭まうけがと見歩けど、いづれも不景  
氣の當節柄暗夜に犬の糞踏だのだと思ふて見ればゴム金  
着に入つた金幣だつたと云ふ様あ甘い事の滅多にあく、夫  
ゆゑ又た函館を去て此度の札幌へ航りしに札幌も開化普  
くゆきわたる人智の進歩、實に驚く計り、併し何をいふても  
北海の隙地あれば都會の開化に比す時々の屋臺店の餅菓子  
と風月堂の相違あり中にも婦人が鼻下にする刺墨の如き

八 變 子

の法令のきびしきを凌ぎて之を刺すと支那人が阿片煙草を吸ふに比しく、然れば容貌玉の如き美女といへど鼻より下の宛然鬼女の面を冠りし如く可笑さも可笑ければ凄きも又た凄し、なれども原來目尻の下った珍兵衛ゆる凄きも可笑いも頓着なく女とさへ見れば、何だの漢だのと申戯いひ懸けるよ向ふも其のデレ助ある事を知るかいろく、あ事言ふて戯れけるが或日のこと珍兵衛の例の如く女をとらへ申戯いひ掛たる中にこれほどの女がアイノとの惜いものぢやと言た、その『アイノ』の言葉が耳へ入ったか件の女の頭をふつて。妾アイノでないシヤモの娘ぢやと聞いて珍兵衛吃驚らあし。人間が獸類の子を産出といふ事い

第 拾 六 笑

れど鶏が人間産んだとの借も不思議千万、何ほど標致よくても闘鶏の子の御免候らへ、アイ怖いくと身ふるひ爲るを夫と知らねば、美女のうち笑あがら。妾あきたと同じとシヤモの子ト再びいふに珍兵衛よがくしい事に思ひ。エー馬鹿らしい事いふナ、私がナニ闘鶏の子で有う、立派な日本人ぢや、爾も竹に雀のナアニア品能く留るといふ仙臺様の御舊領地の者ぢや、何ぼ鶏が理化學を修めても此様立派な人間が産出られて堪るものか、いふにも事に寄れ飛でもない事をいふワ、と怒り出すに美女の不思議がり。妾の世界よシヤモはど好土がないと思ふよりシヤモの子といふたのあれど夫が氣にいらすの詫やうと、いふに此度の

八 變 子

珍兵衛が不思議がり。ハテナそれで何か知らん此土地  
 での闘鶏が趣いとか何とかいふ所から闘鶏を太切に思ふ  
 て遂に闘鶏の子といふ様にまで成たのであらうか、ヨシ  
 それあらば已も一番脅かして遣うと大きな聲で。お前が  
 シヤモの子あら此方の熊の子だ、イヤ熊の息子ぢやと足踏  
 んで威張出したに美女の吃驚し。ナニそれでいお前さん  
 のアノ熊の子ぢやと、是の大變噛れぬ中と腰にさげたる比  
 首をガタ／＼いはせて逃げ出したり是れ逃げるも道理、熊  
 との北海道の景物、横町の甚太郎、作物あらされて困れば向  
 ふの八兵衛孫を殺れたとて怒り、熊と見る時の誰も皆お恐  
 れて逃るほどゆるる今珍兵衛が熊の子だといふたを聞くよ

第 拾 六 笑

り美女のびつくりして其場を後にかけて出し宅へ歸るや否  
 き。大變／＼油断ならず、此間より此近邊を徘徊する目  
 尻の下つた男の日本人とおもひの外、今日あふて聞けば熊  
 の子ぢやと自分の口からいふて居た、うツかり爲ると又た  
 出て来て自宅の牛でも奪て歸らうと顔色青くして言出し  
 た、又家内の者もうち驚き。さてい先ごるより作物あらし  
 たり牛とつて歸つたり仕た、其の熊の子の所業であらう  
 ヨシ／＼近所の者等へ事の次第を知らせて早々退治て呉  
 うと、直に近邊を駈あるいて甲乙へ前の始末を話したるに  
 一同それが宜からうと時を移さず各自に得物引携て集り  
 來りし人数の三十有餘人居る、何方ぞ案内せよと怖がる

八 變 子

娘を先よ立て駈出そ父親近所の甲乙。夫との知らず芋江  
 珍兵衛那の娘が逃げて歸つたの不思議な事跟かッかけて  
 容子聞かむと豫て覺わし娘の家へ來掛る道よてハツタリ  
 あふたの右の獵人珍兵衛の姿見るより四方を圍み。ヤア  
 ヤア熊の子其處動くな斯して我々捕へに向ふたからの迎  
 も這れぬ汝の命心残さず死ッて仕舞といふより早く持  
 たる得物をふり翳してぞ打かける意外の容子に珍兵衛お  
 どろき。コリヤ何をいたす何をするのだ、人まぢがひを爲  
 れて堪らう、マア、待たと叫び立ど、一同のあか、靜る  
 所か。此奴さやうな事いふて噛つかうと爲るヨナ、諸氏油  
 斷あさるナ、早く息の根どめて遣んと四方より打りつける

第 拾 六 笑

に珍兵衛何かの以つて堪るべき、免せ、と詫る中にコリヤ  
 熊の子といふた故其の熊と間違ふて斯の我をバ打るもの  
 かと思へバ珍兵衛聲はり上げ。我の決して熊の子あらず  
 實の虎の子にて有るぞといふに一同も漸く得物ふり上た  
 手をとれめ。かた、待れヨ、此奴熊の子との我  
 等を欺きし事にて、其の虎の子にてありしか、コリヤラツカ  
 りとの殺されおいと年老ッたものが言出すを、一同不審と  
 事情を聞くに、年老者仕たり顔していふやう。されバあり  
 虎の子とわれバ北海道にも餘りあいの、夫ゆゑ諸人へ見  
 せるため此ま、生捕にいたす方よろしからんと思はると  
 の説明に一同あるほどと賛成あし寄て掛ッて珍兵衛を縛

○第拾七笑

珍兵衛身の難を救れて喜び  
奇代玉の所在を知つて勇む

八 變 子  
一同の珍兵衛を縛り上げて連歸り此者の朝鮮から航りまし  
た虎の子で御さいと見世物に仕やうと相談して居る事を  
聞き是の何かの間違あるべし我れ行きて救助得させむと  
駈て來た一個の旅僧早計にも小屋を掛かけてゐる者  
等を制し容子を聞けば果せるかな捕はれし者こそ紛れな  
き日本人にて何故斯く間違しかといふに珍兵衛の前も  
既たる如く那より團圓の子といひたるより此方の其上ゆ

第拾七笑

く積りで熊の子といひ熊の子でまぐヒツたから此度の思  
ひ切て虎の子ぞと言立たるものにて是といふも當地で日  
本の事をシヤモと稱する事を知らざりしより斯る間違の  
起つたるものあるが是等の彼地へ行れし諸子能く知らる  
る所あらん尤もアイノアイノと云はるゝ事を耻ぢ皆シ  
ヤモの子すあはち日本人の子ぞと言たがる風習ありて之  
を譬へて云ひ田舎ものが半年か一年東京の水を呑で何  
縣とか何郡とか自分の故郷を明白にいふを耻ぢナアに  
己の東京ッ子マンベいと未だ語尾に國語の附てゐるに氣  
づかず東京ッ子ぶると同じ事あり何れ兎まれ右の旅僧の  
珍兵衛をたすけて予が旅宿へ伴ひ歸り段々話しあふて見



るに珍兵衛の産生てより肌身はなさず持ちある玉ありて  
 其の玉にの腎の字ありくと見えぬる由あれば旅僧おほ  
 さに驚きて。さての和郎こそ我が探す所の人にて、事情の  
 如此あり、大坂天満の真中に傘張を以て業とそる伏屋比目  
 助といふものありて、是より本編の初めに記したる比目  
 助の身上を委しく語りしうへ、我の餘りの事の不審さに比  
 目助の菩提を吊ふため金成大好といふ舊の名を奇代と改  
 め僧とあつて永らくの間諸所方々を巡り、玉の所在を求  
 めたれど今日までも其の玉を持しといふ人にも逢ず、真に  
 心外におもひ居たる所、圖らずも今日斯して和郎に逢ひし  
 と實に天帝の興へあり、夫について、此餘の玉を持あるも

の有るに相違なければ猶は天帝に祈禱をこめて弘く求め  
 む覺悟されば和郎も我に力を協はせ、身が僞兄弟にある人  
 を捜すの心あきかとの事に、珍兵衛何かの否むべき。然の  
 去あがら今も大概述たる如く私に仙臺を喰つめて、活る北  
 海の果迄も航り來たるものなれば、諸方を歩く路用無しと  
 言せも敢す奇代うなつき。その心配に及ばぬ事、我れ些  
 少あがらも猶は餘りたる路用あり、又た夫があくなる時、  
 外に金作るべき法策あれば、必ず心配せらるゝと慰め立  
 るに珍兵衛大さよ喜び。路用さへ其様にあれば、他の事の  
 憂ふるに足す明日より同道して諸方を歩くべし、然して豈  
 夫といふもへど斯して來たからあれば、兎もかく北海道を

一とほり歩きて見かん、と云ふよ奇代も賛成して翌日より  
俱にうち連て諸方を歩き、求める玉持の人やあるかと捜  
し廻れど、我れ其様も玉所持なすと出して、跡す者もあらね  
ば早や北海道の是まであり、此上の奥州地へ航りて見むと  
便船もとめて一度仙臺へ出し、當地の珍兵衛のため、永  
く足をといめる事ならず直に立て白川邊より會津の若松  
へ行き、捜し廻ると雖も更に玉持ちし者に會はず、夫ゆゑ此度  
の陸路東京へ登りし後、また一個の笑ひ話を作る一段の事  
の長さゆゑ次笑へ譲らん

○第拾八笑

金城に偽兄弟玉搜索の手順を讀し  
大坂に三變子初對面の趣向を凝す

奇代の珍兵衛を伴ふて東京へ登り例の如く玉の所在さが  
し歩くらうち、或人がいふよ、吉原へさへ行け、何の様な玉  
でも有るから、玉さがそあら吉原へ行て捜しなされとの注  
意に、それでいと吉原へ入り、或る樓の前に立て。モシ、  
一寸と伺ひます此邊に黄色い玉を持て居る人の有ません  
か、有るなら教へて下されとの頼み、若い者笑いかから。  
和尚さま御ぢやうだん仰しやして、いけません、黄色い玉  
など抱へてある家が、何うして御ざりませう、何樓も皆、白  
い奇麗な玉ばり撰て抱へるのです、といふ袖一人の若者

子 變 八

が引いて。コレく外樓の知事、自樓のチャンと五色の玉が抱へてあるぢやないか、ソレく、宜か分つたか、と目尻で知らすに一人の若者、ヤツと呑込で。なる程く、自樓に黄色い玉のまをすまでも無い事、赤染さんに黒衣さん、青山さんかどと云ふ色の白い、イヤドッコイ黄色い上玉ばかり、サアオツとお登り下され、決して餘計な御散財のさせませぬと両袖とらへて勤めるに、奇代も珍兵衛も夫からバと案内につれて二階へ登り、早く黄色い玉を見せて貰ひたいと云ふに、只今これへ参りますと挨拶する後より、ユ一と現はれた二人の花魁、奇代ふしぎがりて是の變ぢや是の妙ぢや私のいふの、黄色い玉、夫よあれの太夫といふ者で



芋塚を建て八變子祝酒を酌む

笑 八 拾 第

ないか、田舎ものと輕侮であんまり馬鹿な仕をるなと怒り掛ると新造が怒らせもせず。貴郎の「マア野暮な事かッしやる、其様か事いはずと酒でも飲つて無理に酌して掛るを奇代とねのけて。イヤ」その策の喰ね、サア歸らう馬鹿らしいと有あはず皿蹴散かして立去らむとするに反對、早やアレと仕掛た珍兵衛、マア能いマア能いと無理に押するあがらトウ、一晩泊り込で仕まひ、翌朝氣が普て平蜘蛛の如く奇代よ詫入り、スゴく吉原を立出たるが奇代顔を盤めていふ様。イヤ東京の聞しに勝つて怖い土地ぢや、モウ、東京よの一日も足を駐るが否と其日の中に東京を去りて東海道を大坂さして下る途中、序でなればと

八 變 子

尾州名古屋へ立寄るに、同地大洲新地で興行なしゐる奇術の芋山道拙として、實に妙不思議ある奇術を行ふとの事に、奇代眉をひそめて珍兵衛にいふやう。芋といふ字を呼で名とするもの其の類あり、而て見れば件の芋山といふも若や八つの玉を持つ一變子にていあらぬか、兎も角ゆきて委しい事聞いて見やうと、うち連だちて大洲新地へ行き、さて右奇術師道拙といふに逢ふて不縁に尋ね出したるに、道拙も思ひ當るに膝すゝめて。如何も拙者の仰せの如き玉を所持いたし居れり、然して其の玉を持つもの我れ一人あらず、當時口演者とありゐる芋皮呆助と云へるものと又た手術の幕合につあきのため、踊あどする芋坂尻野といふ者、何れ

第 拾 八 笑

も黄色き玉を持つて、我が持つ所の玉の窮の字あるに因ひか、年中困窮をさはめ、亦た呆助の奇の玉もつだけ奇代あ事を好み、尻野のまた痴の玉持ちて是も女形といふに、因めり、而て貴僧の方にも如此き玉持つ人のあるにやと、問ふをも待す珍兵衛進み出て、我が所持する玉を跡とよ彼方の三變子も是の圖らずも一變子を得たりと喜ぶを奇代制して。イヤ、四人顔を合せしとて未だ心をゆるして喜ぶべきよ非ずといふ譯のと、比目助が死したる事より八個の玉が飛し事、また身がその玉の落たる先を探るため斯も行脚する事まで漏かく語りたるより三變子もいよくうち驚き然れば我等も是から残りし四變子を心して捜さんが

貴僧のこれより何方へ参らるゝか、行るゝ土地を購置さて、若し分りしあらば直に電信であり郵書であり委細お報知せまをすべしといふに奇代も。夫の有難し愚僧の明日にも此地を去て一先づ故郷の大坂へ歸り其うへ南海地方を捜す積り、いづれ其の行地々より怠らず手紙出すべしとて言葉を書へ、翌日名古屋を立て大坂へ歸りしが話頭かはつて、變入の一先づ作太郎の許を辭して和歌山へ戻り愚文吾と痴能に事の次第を話したるに、夫の思ひ懸あき事ありと驚き且喜び、直に紹介を仕て欲しいといふを暫しと押とめ。その先方の作太郎といふの無法の行をしてゐるほどの男あれば、何んぞ此方も初対面の趣向をつけて行きたい

と思ふが何ぢやとの事に、二變子もあはれほど、賛成して其の初対面の趣向よの何よるしからうと相談するうち變入膝うつて思ひ附たくと未だ云はぬ中から徐々く身高う仕かけたなり

○ 第 拾 九 笑

精神勞せて、新趣向を考へ能舞變じて廿五座とある

變入、痴能、愚文吾の三人の作太郎に初対面の趣向を凝しゐたる中に變入膝たゝいて。イヤ思ひ附たくナンと斯して何ぢや、一同が麻上下といふ服装で四人肩の裾吊して行のヨ、尤も上下に散髪といふのも可笑いから鬘を被ふる

八 變 子

か但しのまた手拭でも齒に見せておつら澄しながら出掛  
 けやうでいかに、どの發言も一同も。夫れ面白からう、併  
 し只上下着た計りでの格別をかしくも無ぢやあいか、夫と  
 も未だ外に趣向のあるものかといふも變八鼻うごめかし  
 て。其の案じの御無用く、斯く申せば失禮ながら此の變  
 八どのが思ひついた事ぢや、滅多に他人から笑はれる様な、  
 イヤ、笑はれねば大變、ドツとふき出して笑ふ様も趣向あり  
 さ、其の趣向といふの斯いふ次第、まづ一同シ、マヂくと言  
 て先駈の假聲を遣ひ、ズーッと作太郎の、宅へ入り、豫て  
 駕の中へ乗てある醬油を取出して進上と置く、是れシ、マヂ  
 シ、マヂと言た趣向にて次の御前に、彼へと敬ひあがら此

第 拾 九 笑

も駕に乗てある膳部を出して、皆が飲むと云ふ趣向さ、ナン  
 と面白からう、實に感心したらう、と自分ばかり鼻高うすれ  
 ど外の者等に、トント面白からず、趣向馬鹿にした話だと  
 吐くを變八聞きとがめてヤツきとあり。夫れで、此の趣  
 向を止う、イヤ止やう、そのやう云ふお前さん達なら定め  
 し外に何か甘い考へがあらうから承はりたい、どういふ趣  
 向があるのか、サア早く聞せて貰はうと疊たゝいて怒るに  
 二變子も閉口して。マア爾うお前さんの様も怒ッて、不  
 良、マが今の趣向の餘り面白くもあいか、何か外に今すこ  
 し面白い事を思ひ附て貰ひたいと頼むのぢや、強ちシ、マヂ  
 シ、マヂの趣向が好しくあいと斷言ので、無から悪く取て

九能舞なれハ蓄麥屋の風鈴といふに因み液鷹鷺麥の服装  
 宜らうかと談合ふに根がイヤカキヤンリンはり割出し  
 が固ツたゆゑ諸君の衣の調度取掛り彼が宜らうか  
 より諸ひッ放し舞つたに夫で宜い事あれ二三度やッて地  
 うと何れも贊成したに夫のと直に稽古にあつたが原  
 も是が氣易くて宜らうとの事よ成ほ此こそ喝采を得や  
 舞あるき只トンくど足拍子とるだけで宜らう何よ  
 らう諸の方も宜加減は胡麻化せば舞の方も手足に任せて  
 く風機にオヤマヤソを能仕粗で何うであ  
 ほどの作太郎どのゆる反て平常の能あどの受まいから極  
 るくあし其所で一同相談のうへ相手が無法の行でもする

相談かけるに痴能が知らぬ代り愚攻吾がトンと當道に明  
 委し知らすまこのそ事もあけよ赤面ぢやが何様したら宜からうと  
 自分でこそ事もあけよ赤面ぢやが何様したら宜からうと  
 仕まひに飛でもあけよ赤面ぢやが何様したら宜からうと  
 を抽たるに變入が乱舞役に當りし鳥も啼ねバ射れも  
 るに困るよそれか好からう面白しと無理は賛成して  
 相かはらす面自からね此度おちやと言出した趣向も  
 作太郎どんの者ハ謠に鳴物と手別けイヤアホン  
 にち他者のハ謠に鳴物と手別けイヤアホン  
 一策おもひ浮た此の三人の中で籤に當つたものが役者





さて一同の作太郎の方にて懇親の宴を開き其席にて偽兄弟の約を結び是より三毛猫退治の事を議するに那れ藝妓の果おれば浮たる性質のものあるべし其處を附こみて已が辯に任せて仇めきたる事をいひ立て若し三毛吉が口に乗りて艶きし事を言出さば直に其の言葉の尻尾を捕へて化の皮剝いで呉むといふに作太郎もあるはと手を取拍ち委細の事を變八に任すに變八こゝろよく承知おし明る直に和歌山へ取て返し四角の許へ行き作太郎どの事につき三毛吉どのへお目に掛りたしと言立たるに三毛吉何事かと思ひおがら一室へ變八を通して逢ふに變八眞面目にあつて時に出者が斯うして參つたの外の事でも有

ませぬが承はれば御息子作太郎殿に別業へ籠りて無法の行とかを爲さる由近頃もつて奇怪な事拙者此度當縣下へ新聞の探訪用にて参りしに如此な事を聞き宜き財料ゆゑ直に大坂の本社へ通信いたさうと存じたが御當家の和歌山でも人の知つたお宅今さら其様な事が新紙へ出て御家名にも關はる事ゆゑ一應當家へ参り御意見の事を勧めにまゐりましたとの事に三毛吉大きに恐れ新聞社の探訪者とあつての作太郎どの、身より我が内幕を發かれての大變と俄に隨従口へラくと叩き猶また變八の容子見て色仕掛けは無事の策めぐらさんと艶めきたる態みせるに變八グニヤリとあつて夫よりの物さへ碌々いはず反て

八 變 子

三毛猫に食れさうな状況ありしが、斯あらんとも思ひしゆ  
 る窃に立歸つて次の室に容子見て居たる作太郎が堪り兼  
 て踊り出し。ヤア三毛吉奴汝初對面の男も左やうな事云  
 ひ掛るから父の目を忍びて奈何様か事いたし居るも計  
 れず、假令父が何と云はれうと此の作太郎が承知をせぬ、今  
 日かぎりキリ／＼此家を出て失せうと足ふみ鳴して怒り  
 立に、びっくり仕て駈來りし父の四角。ヤア作太郎汝氣で  
 も違ひのせぬか、假令以前ハ藝妓でも斯して家へ入たりら  
 ぬ汝のため母で無いか、其の母親も向ふて出てゆけと  
 何事ぞと立腹して拳をふり上げ、作太郎を打り又掛るを  
 變入支へて聲あらしげ。イヤ早計たまふや四角どの、是に

第 貳 拾 笑

ハ深い仔細ありと、先妻のお菱が辻君とまで零落ゐる事を  
 語り殿しく意見を仕たるより、四角も初めて夢の覺たる如  
 く。借の爾ういふ次第ありしか、イヤ過まツたり／＼貴殿  
 の意見を服膺ひ、今日限り三毛吉に暇を出しお菱を家へ  
 呼迎へむと後悔しつゝ、言出したるに、變入も夫でこそ意見  
 の仕甲斐ありと大きに喜び、作太郎と共に歸らじとそる三  
 毛吉の両手捕つて門外へ突出し又直に人を走せてお菱を  
 迎へ來らせ、首尾よく舊の通に納めしこそ目出度けれ、然れ  
 ば此事世間へバツと聞え何社の新紙へも猫退治との票題  
 かきて八犬傳の文句さへ喋々と書立たるに其を見るより  
 大坂に在る奇代と珍兵衛の技にまた四變子の所在を知ッ

八 變 子

て大きに喜び直に事の由を電報にて名古屋に居る道拙等へ言送りしゆゑ道拙とじめ二變子の取る物も取り敢ず大坂へ下り奇代等と共に和歌山へ行き變八杯に逢ひて名乗あふに彼方も此上あくうち喜び是より一同協議のうへ死去たる比目助のため法會を營む事とありその場所の大坂こそ適當ありと茲に奇代和尚を始めとして芋江珍兵衛芋皮呆助芋村作太郎芋坂尻野芋山道拙芋粥變八芋塚痴能芋田愚文吾の九人の者等の打連立て大坂へ出で城東ある志義山の麓へ芋塚といへる一大石碑を建て其の碑前にて比目助の佛事を營みたるが斯く八變子顔を接せし上の再び散亂する事情の忍びざる所にて願くは此まゝ芋塚の傍へ

第 貳 拾 笑

一寺を建て奇代和尚を住職と仰ぎ俱に佛門に入て餘世を送つてのといふこそ表面同樂三昧仕たい儘に日を暮していと發言した者あるに孰れも賛成して一寺を建立する事み決したれと誰とて資金出す者あきりに困り果て居たるを九輪四角が聞て其の心配の無用なりと巨額の金を投じて變子等が望みの如き一寺を建立したるより八變子の各自の大きに喜び有髪のまま當寺へ住込みて世を一分五厘に送る事とありしより近邊の者等の仙人でなく變八ぢや笑ひ稱するとなん穴をかし子く

漫草 八 變 子 大尾 仕組

明治廿三年一月廿三日印刷  
同年一月廿四日出版

百六十二

定價金參拾錢

版權所有

發行者

京橋區銀座貳丁目六番地

千葉茂三郎

廣本堂錄

印刷者

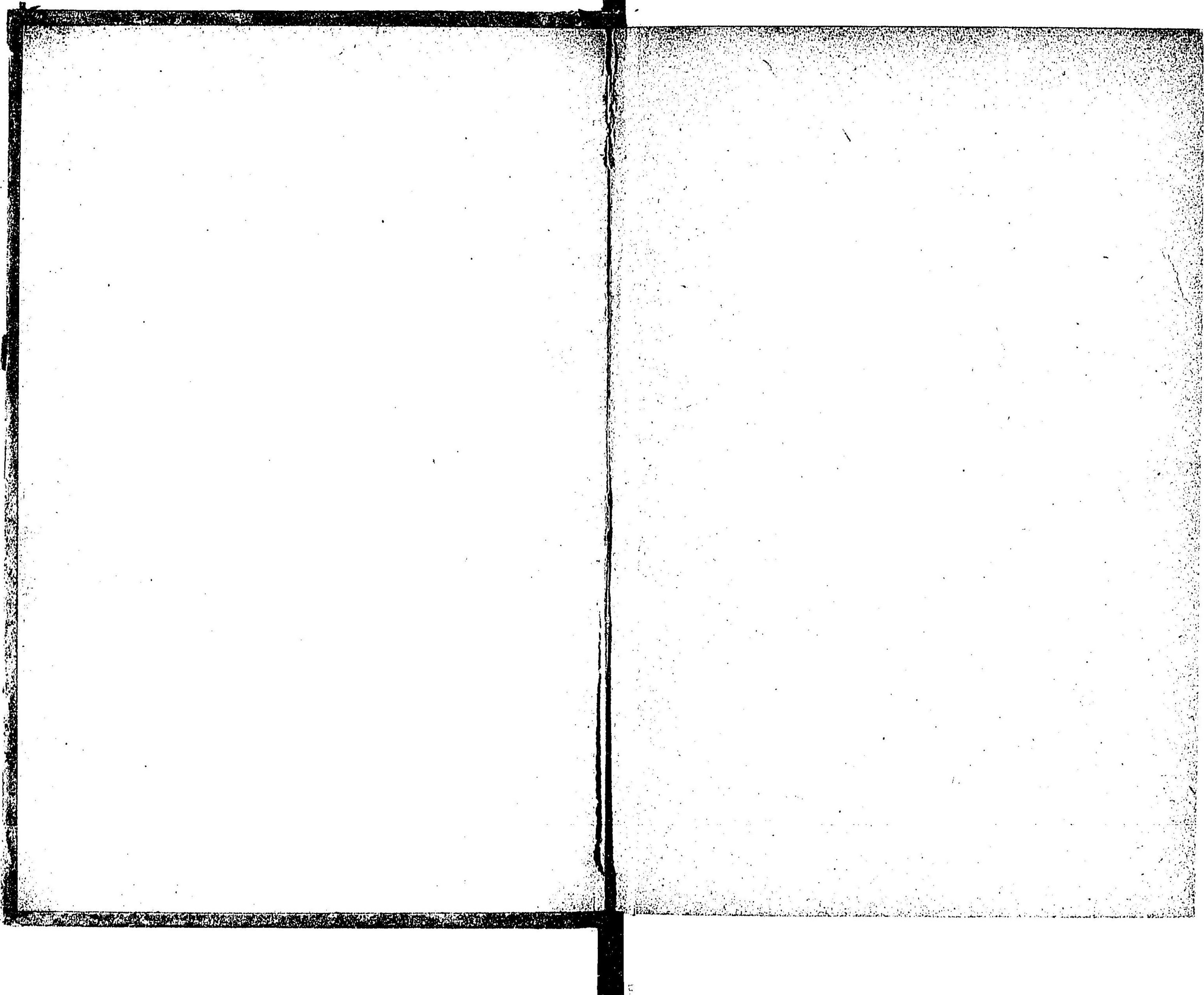
京橋區銀座貳丁目拾貳番地

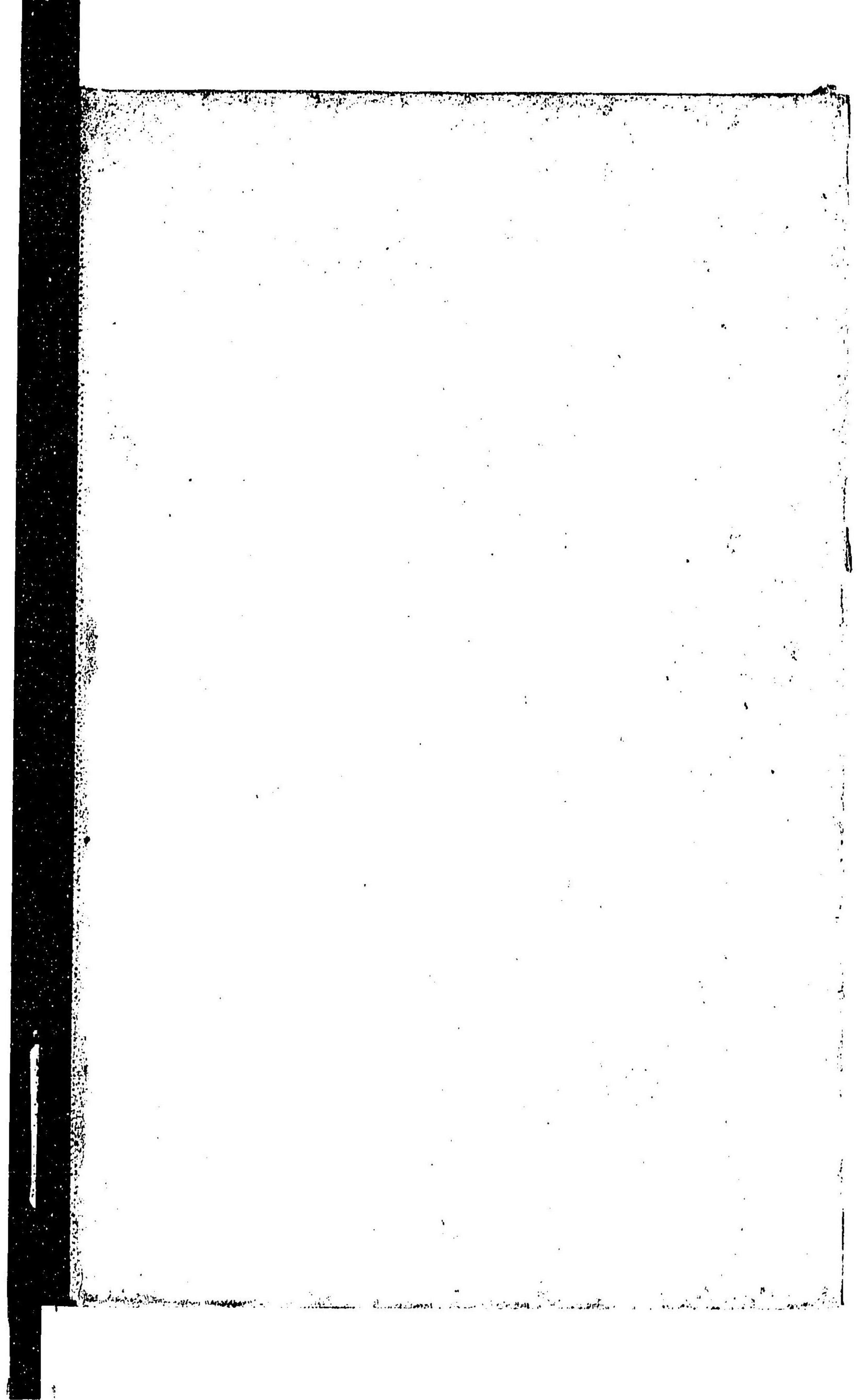
宮本敦

發行所

京橋區銀座貳丁目六番地

共隆社







091842-000-1

特11-824

八変子

香風園主人/著

M23

DBO-0360

